

地域文化学研究报告書



山形県立小国高等学校

「ためになる蛍光のはなし」

班員 伊藤僚紘 伊藤諄政 植村裕斗
大谷雅輝 野本知宏

1. テーマ設定の理由

世の中のありとあらゆる物質・材料には色が存在する。物質・材料の色について考え、身近な蛍光ペンの仕組みについて学び、合成してみたいと思いこのテーマを設定した。

2. 研究の概要

- (1) 光の持つ性質などについて学習した。
- (2) 蛍光物質「フルオレセイン」と「ルミノール」を合成し、発光現象を観察した。

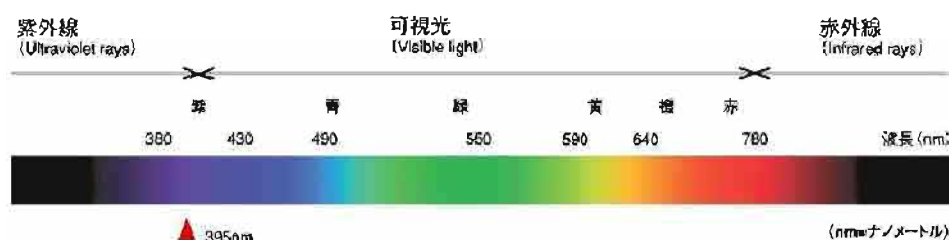
3. 研究の結果

(1) 光とは

①光の正体について

私たちは沢山の色に囲まれて暮らしている。しかし、太陽の光が届かない夜の景色は黒一色である。鮮やかな色彩の花も、光が当たらなければその光は見えない。色は、光があるから見えているのだ。光は普段あまり意識せず無色透明に感じているが、実は複雑な仕組みがある。光が白色だけであれば私たちは色を認識できない。色が付いて見えるのは光に様々な色が存在しているからだ。

光は大きく分けて7色の光からできている。その7色とは、紫、藍、青、緑、黄、橙、赤だ。白色光をプリズムに通すと、屈折率の違いからこのように光を帯に分解できる。これを**スペクトル**という。



図の数字は光の波長を表している。波長の短いほうから紫→赤と変化する。白色光を**分解してできる7色は虹の7色と同じだ**。

虹は、雨上がりによく見える。なぜなら、空気中の水滴がプリズムの代わりにして太陽の光が屈折という現象により曲がったときに、7色に分かれるため、虹が見えるのだ。逆にいえば、**自然界の光はすべての色の光が組み合わさって白く見えているだけだ**。白い光というのは存在しないのである。

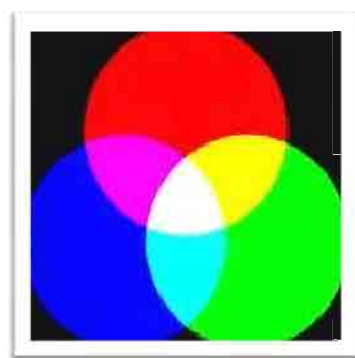
②光の3原色 (R・G・B)

光は赤 (R)・緑 (G)・青 (B) の三色で全ての色を表現することができる。これを光の3原色という。具体的には以下のように色を作ることができる。

- ① [青] + [赤] = [マゼンダ]
- ② [赤] + [緑] = [イエロー]
- ③ [緑] + [青] = [シアン]

そして、これら三色の光を同じ強さで合わせると、白が表現できる。

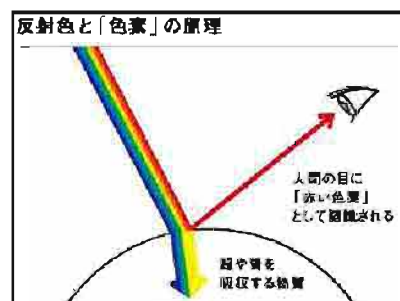
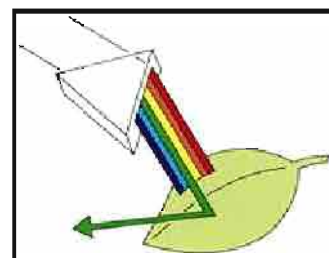
RGB の光の強さ・色の組み合わせなどを微妙に調整することで、すべての色が再現可能となるため、カラーテレビなどにこの3原色の原理が応用されている。



③物の色の見え方

これまで述べたように、光には色があり、混ぜることで別の色を作り出し、すべての色を表現することができる。このような混色の方法を、**加法混色**という。

これに対し、物の見える色は全く違う方法で考える必要がある。例えば葉っぱだ。葉っぱは緑色に見えるが、実際には、赤色や青色に近い波長の光を吸収し、緑色に近い波長の光を反射している。その光が私たちの目に入るので、緑色に見えるのである。つまり、物の色は反射した光の色によるもので、光の色の引き算によって色を作っていることになる。そして、引き算する光の色や量の違いによってすべての色を表現することができる。このような混色の方法を、**減法混色**という。

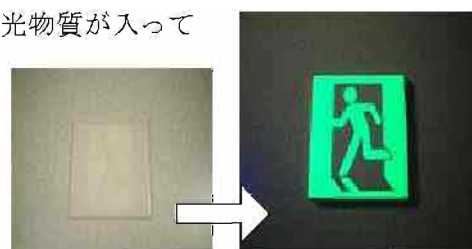


④蛍光について

蛍光とは物質に光が当たると特定の光を吸収した後別の光を発光する現象である。蛍光の現象を利用した身近なものとしては蛍光ペン、教室などで使っている蛍光灯、反射板などがある。

また、避難経路を示している非常口のマークにも蛍光物質が入っている。災害時など暗くて周りが良く見えないときに、蛍光物質が弱い光に対して強烈に光を発するため目立たせることができかなり役立つのである。

蛍光物質は粉末状に作ることも可能であり、この粉はキーホルダーを作るときなどに混ぜることで



非常口のマーク

発光させるようにできる。このキーホルダーはランドセルやカバンにつけることができ、昼間はかわいいマスコットとして、夜は車のライトなどによって歩行者を目立たせる道具として利用することが可能である。



このように、いろいろな場所で蛍光物質が活躍している。

(2) 蛍光物質を作る

蛍光物質として蛍光ペンの原料に使用されている、「フルオレセイン」の合成および、ルミノール現象による発光実験を行った。ルミノール反応とは、科学捜査でも利用されていてサスペンスドラマなどでよく聴く化学反応である。特に血液に反応し、血痕を見つけるときに用いられる発光実験である。

・実験器具：試験管、駒込ピペット、20ml メスシリンダー、試験管はさみ、

試験管立て、薬さじ、手袋、ヒートガン、携帯型 UV 検出器

・使用薬品：無水フタル酸、レゾルシノール、濃硫酸、蒸留水、エタノール、水酸化ナトリウム (3 mol/l)、フェリシアン化カリウム

・実験

①フルオレセインの合成および蛍光挙動観察

- i 無水フタル酸 0.1 g、レゾルシノール 0.1g (両方とも白い粉状の薬品) を試験管 A に入れ (写真 1)、濃硫酸を 2 滴加えて (写真 2) 軽くふり混ぜた後、ヒートガン (ドライヤー) で穏やかに加熱した。(写真 3)



写真 1



写真 2

濃硫酸は劇薬なので手袋・ゴーグルを使用



写真 3

- ii 内容物が融解し赤褐色に変わったら加熱をやめて放冷した。(1 分程度)

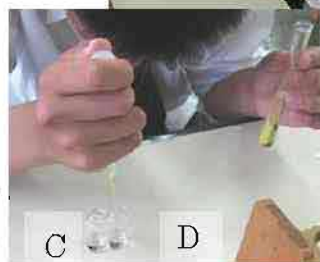
- iii 得られた赤褐色の化合物を薬さじで少量取り出し、試験管 B に移し、メスシリンダーで計ったエタノールを 10ml 加えた (写真 4)。(化合物がエタノールに溶けて無色透明なエタノールが混入直後に黄緑色に変化する。)

写真 4



- iv 蒸留水を 3ml ずつ 2 つのサンプル瓶 C, D に採った。次に、それぞれのサンプル瓶に、iii で作った溶液を数滴加え、同じものを 2 つ作った。(写真 5. 対照実験を行うため)

写真 5



- v サンプル瓶 D にのみ水酸化ナトリウム水溶液を数滴加える。混入直後から光を発した。(写真 6)
- vi 室内の蛍光灯を消して観察すると違いがはっきり見えた。さらに、試験管 C, D にブラックライト (波長: 365 nm) を照射した。(写真 7) 水酸化ナトリウムを加えたサンプル瓶 D だけが強烈に光った。(右から空瓶、水酸化ナトリウム混入、水酸化ナトリウムなしのサンプル瓶)

写真 6



写真 7



②フェリシアン化カリウムを使ったルミノール試験

- i ルミノール粉末 20mg と水酸化ナトリウム (固体) 1g を計量し (写真 8)、蒸留水 10ml の入った試験管 E に加えた。(水と水酸化ナトリウムが激しく反応し熱を生じるので注意した)
- ii 駒込ピペットを用いて、30% 過酸化水素水を 0.5ml 試験管 E に加える。固体と反応が進むようにガラス棒でかき混ぜた。

写真 8

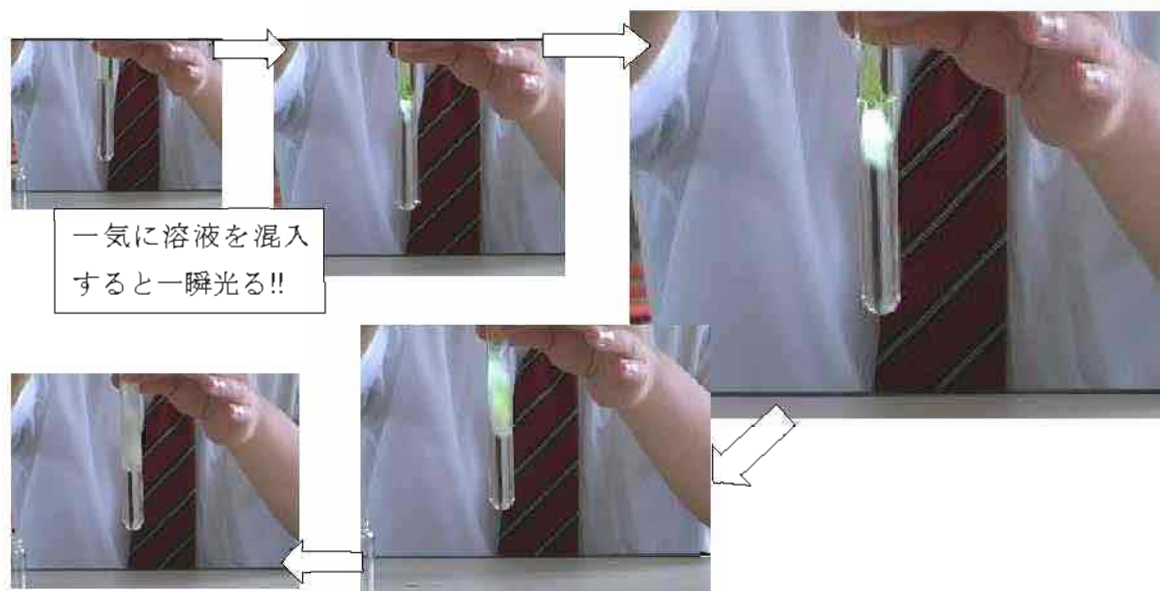


水を入れると激しく反応し熱くなる!!

iii フェリシアン化カリウム 0.2g をサンプル瓶Fにいれ、蒸留水 1 ml を加え仮想血液を作った。(写真 9)

iv 蛍光灯を消した状態で、3ml 駒込ピペットを用いて試験管F 中の溶液の一部を、試験管E に一気に加えた。

このとき、ピペットの先を試験管Eの液面まで、近づけ一気に加えたところ、試験管上部で、一瞬だが強い光が生じた。



4. 実験を通して感じたことや地域への活用（まとめ）

(1) 実験結果に対する感想

薬品や溶液の計測を正確にやろうとするとなかなかスムーズにできず、手間取った。思ったよりも、ヒートガンの威力が弱くて色が変わるまで時間がかかったし、出来上がった化合物が放冷中に固まっていたので薬さじで取り出すのが大変だった。溶液ができるまでの1時間は必死になって取り組んだのであつという間だった。最後の作業で、水酸化ナトリウムを混入するといきなり溶液に変化が見られ、光りだしたことに驚いた。ブラックライトを当てることで、さらに強烈に光った。きれいだった。予想以上の発光に、全員「おお！」と感動した。

ルミノール実験は、溶液の作製がフルオレセインの合成よりは簡単で、また、実験に慣れてきたこともあって手際よくできたと思う。仮想血液を一気に入れることで生まれる一瞬の反応の大きさが衝撃的だった。まるで、カメラのフラッシュライトのような明るさで、本当にびっくりした。この反応が面白くて、みんなで何回も繰り返した。

蛍光ペンの成分が、こんなに簡単にできてしまうことに不思議な気がしたし、ルミノールの反応は正直こんなに強烈に光ると思っていなかったのが驚いた。このぐらい強烈に光るからこそ、ほんの少しの血痕でも見逃されずに見つけることができるのだと思った。

(2) 地域への活用

私たちは、今回の活動で学んだことをなにか小国町に生かせないかと話し合う中で、危険を回避するために蛍光物質が使えると考えた。次の3項目を提案する。

①「道路の白線に蛍光物質を混ぜる」

蛍光物質を使って少ない光でも強く光るようにすることで、夜道では、歩行者も運転手も安全に通行できるようになる。

②「看板へ使用」

「危険！」や「止まれ」などの文字を目立たせることができ、危険個所がわかりやすくなる。

③「ポールを目立たせる」

車や歩行者のために、小国町では冬になると道路わきにポールが数多く設置される。このポールを蛍光物質により今以上に目立たせることで転落を未然に防ぐことができる確率が高くなる。



5. 感想（個人別）

(伊藤僚紘) 授業を通して蛍光について詳しく知ることができた。実験はとても楽しかった。

(伊藤諄政) 蛍光について学習は、初めて知ることが多かったが楽しく取り組むことができた。実験が特に楽しかった。

(植村裕斗) 授業を通して、今まで知らなかった蛍光について、細かいところまで知ることができた。特に、フルオレセインの実験では、あんなに強烈に発光するとは思わなかった。大変良い活動ができたと思う。

(大谷雅輝) 最初の頃は難しい内容だと思ったが、前山先生から教えていただいているうちに、今まで自分の知らなかったことを知ることができ楽しくなった。光や色について深く考えるととても良い活動を進めることができたと思う。

(野本知宏) 今回の活動を通して、今までよりも色について深く考えるようになった。大学で習うような難しい内容だったが、光や色に興味がわいてきた。また、実験では、自分で薬品を調合してものを作る感動を味わうことができ、とてもいい経験となった。

最後に、ご指導いただいた山形大学工学部 前山勝也先生 ありがとうございます。

昔物語から探る小国町

船山 滯 舟山香菜子 小関真奈 齋藤麻未 伊藤悠飛

1. テーマ設定の理由

昨年、先輩達は「小国の昔物語について」というテーマで小国町南部地区に伝わる昔物語を調べ、レポートにまとめました。私達はまず、それを読み調査内容とその活動の意義を理解することから始めました。そこで教えられた「歴史を伝継することの大切さ」との視点から、足がかりを作ってくれました先輩方の意志を汲み、大テーマを引き継ぎつつ、北部地区を新しく調査の対象に加え、小国町の歴史を探っていきたいと考えました。

図（羽前小国郷の歴史）より

2. 調査の概要

- (1) 羽前小国郷の集落
 - 1 集落と大字名
 - 2 集落名の由来
- (2) 昔物語について
 - 1 語り部さん
 - 2 昔物語収集
- (3) 北部の街道
 - 1 柳生戸街道
 - 2 西山街道
- (4) 物資の輸送
 - 1 陸の輸送
 - 2 川の輸送
- (5) かるた制作
 - 1 制作にあたり
 - 2 かるたを作る



3. 調査の結果

- (1) 羽前小国郷の集落
 - 1 集落と大字名

北部地区

集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名
徳網	とくあみ	五味沢	中里	なかざと	舟渡	松崎	まつさき	松崎
樋倉	ひぐら	五味沢	上平	うわだいら	舟渡	尻無沢	しりなしざわ	尻無沢
五味沢	ごみさわ	五味沢	入山	いりやま	舟渡	網代瀬	あじろせ	網代瀬
出戸	でと	五味沢	蟹沢	かにさわ	舟渡	入折戸	いりおりと	入折戸
石滝	いしだき	石滝	宮ノ崎	みやのさき	舟渡	樋ノ沢	ひのさわ	樋ノ沢
中野	なかの	石滝	窪	くぼ	舟渡	中島	なかじま	中島
栃倉	とちぐら	栃倉	焼山	やけやま	焼山	長沢	ながさわ	長沢
鷲	おどろく	鷲	荒沢	あらさわ	荒沢	小股	おまた	小股
越中里	えっちゅうざと	越中里	折戸	おりと	折戸	太鼓沢	たいこさわ	太鼓沢
今市	いまいち	今市						

本町地区

集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名
金目	かなめ	金目	若山	わかやま	若山	大宮	おおみや	大宮
開拓	かいたく	吉田・金目	館	たて	若山	湯ノ花	ゆのはな	湯ノ花
長萩	ちょうはぎ	古田	舟場	ふなば	増岡	北	きた	北
古田	ふるた	古田	団子山	だんごやま	増岡	二本柳	にほんやなぎ	北
小渡	おど	小渡	下林	したばやし	増岡	高稲場	たかいなば	西
玉川口	たまがわぐち	小渡	横道	よこみち	増岡	田沢頭	たざわがしら	田沢頭
越戸	こえと	小渡	増岡	ますおか	増岡	新屋敷	しんやしき	新屋敷
貝少	かいしょう	貝少	沖	ますおか	増岡	針生	はりう	針生
片岩	かたいわ	小国小坂町	小戸	こあし	小国町	町原	しんばら	町原
腰巻	こしまき	小国小坂町	緑町	みどりちよう	緑町	木落	きおとし	町原
小坂町	こさかまち	小国小坂町	栄町	さかえまち	栄町	杉沢	すぎざわ	杉沢
小国町	おぐにまち	小国町	岩井沢	いわいさわ	岩井沢	新原	しんばら	新原
大滝	おおたき	大滝	朝篠	あさしの	朝篠	請向	うけむかい	伊佐領
小倉	こぐら	小倉	水沢	みずさわ	朝篠	伊佐領	いさりよう	伊佐領
種沢	たねざわ	種沢	大石	おおいし	伊佐領	古屋敷	ふるやしき	綱木箱ノ口
松岡	まつおか	松岡	向大石	むかいおおいし	伊佐領	箱ノ口	はこのくち	綱木箱ノ口
黒沢	くろさわ	黒沢	蝶池	いもりいけ	伊佐領	高坂	たかさか	綱木箱ノ口
綱木	つなき	綱木箱ノ口						

南部地区

集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名
下新田	しもしんでん	玉川	泉岡	いずみおか	泉岡	滝倉	たきぐら	滝倉
玉川新田	たまがわしんでん	玉川	古屋敷	ふるやしき	小玉川	菅沼	すがぬま	菅沼
玉川	たまがわ	玉川	長者原	ちやうじがはら	小玉川	足野水中里	あしのみずなかざと	足野水中里
片貝	かたかい	片貝	川入	かわいり	小玉川	百子沢	ひやつこざわ	百子沢
向片貝	むかいかたかい	片貝	六斗沢	ろくとざわ	小玉川	北山	きたやま	百子沢
中田山崎	なかたやまざき	中田山崎	小玉川	こたまがわ	小玉川	市野沢	いちのさわ	市野沢
山崎	やまざき	中田山崎	樽口	たるくち	樽口	足野水	あしのみず	足野水
玉川中里	たまがわなかざと	玉川中里						

津川地区

集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名
木ノ谷	きのだに	市野々	西滝	にしだき	西滝	高松	たかまつ	白子沢
市野々	いちのの	市野々	大石沢	おおいしだ	大石沢	森残	もりのこし	白子沢
叶水	かのみず	叶水	胡桃平	くるみだいら	大石沢	沼沢	ぬまざわ	沼沢
オノ神	さいのかみ	叶水	高野	こうや	大石沢	百子沢	ひやつざわ	沼沢
土尾	つちお	叶水	赤沢	あかさわ	大石沢	明沢	みようざわ	沼沢
二渡戸	ふたつど	叶水	豆納	ずのう	大石沢	遅ノ越	おそのごえ	沼沢
山崎	やまざき	叶水	桜	さくら	白子沢	間瀬	まぜ	沼沢
新股	あらまた	新股	沢中	さわなか	白子沢	綱川	つながわ	沼沢
河原角	かわらづの	河原角	白子沢	しらこざわ	白子沢	屋敷	やしき	沼沢
東滝	ひがしだき	東滝						

2 集落名の由来

小国町北部地区の主な集落名の由来。（昔物語として残っているものについては後に記述）

栃倉	白山姫神社の境内に、根元から二股の栃の大木が生い茂り、その面積3反歩に広がったという。栃の木の実から蔵でも建て豊かな村があったのか栃蔵という地名であったのが現在の栃倉に変わったのではないかとこの集落のお年寄りの話である。今なお栃の木一株元があるそうです。
尻無沢	集落の中心部に西の山合から小沢が流れ出しているが、当集落が出来始めた頃は沢の出口付近一帯が芦の湿原で、沢の行き先が確認されなかったために、「しりのないさわ」ということで、尻無沢と呼ばれるようになったと伝えられている。 （ふるさと学習資料委員会 編集委員長 栗田寛美氏）より
網代瀬	集落の古老に聞いても、地名の由来については不明であるが網代（あじろ）というのは川の瀬に、竹で編んだ網を仕掛け魚を獲る漁のことをいい、この地区の人々は昔、その漁を業いとしていたことが推察できる。また、この地区は昭和の初め頃まで、荒川を渡し舟で渡し、川向いの若山地区と行き来していたそうである。 （ふるさと学習資料委員会 編集委員長 栗田寛美氏）より
舟渡	承久の変（西暦1221年）によって、佐渡に移された順徳上皇がひそかに彼の地を脱出し、越後より荒川沿いに上り、当時の通路である八ツ口・越戸を通り、沖庭峠を越えて小渡に至り、さらに舟渡・越中里をすぎ朝日岳を越えて、村山方面に出られた。そして、北村山郡の御所山に行かれたと伝えられている。その時、上皇が荒川を渡渉（お渡し）せられたことにちなんで小渡（元、御渡と書いたという）の地名が生まれ「舟でお渡し」なされたことから舟渡地名が生まれたといわれる。 （小国町史 順徳天皇に関する伝説）より 上皇が通ったといわれる裏づけとして、上皇は観音様と天神様をご信仰されており、お供の者に2つのご神体を持たせてこられたが、いずれも小国で紛失された。その1つが針生吉祥寺の長田の観音様（聖観音で小渡地内長田という田の中から発見されたもの）であり、他の1つは越中里の落（ふき）の葉の葉天神（落の下より発見されたという金刻の神像）であるといわれている（小国伝説集）より
貝少	その昔、貝少地区は水が冷たく、つぶや、たにし等の貝類が良く育たなかったという。また海の貝類の化石が少なかったことから名前がついたものと思われる。 （ふるさと学習資料委員会 編集委員 木村俊三氏）より
館	字の如く「やかた」と称されるが、大昔に、城とまではいかない館があり、高貴な人が住んでいたのではないかと、古くからいい伝えられてきた。地形的にも、人の住む場所としては、住みやすい場所であったに違いない。周囲から、石器、土器などが多数発見されていることから、考古学的にも間違いのない、生活の場であったと思われる。集落の歴史として推定されるのは、最も古い家で6代目くらいであるから、およそ200年～500年と思われる。 （ふるさと学習資料委員会 編集委員 舟山数夫氏）より
新屋敷	昔、河原だった所を新しく耕して集落をつくった所なので、新屋敷（しんやしき）といわれている。当時は20戸程あったといわれる。 （ふるさと学習資料委員会 編集委員 和田一枝氏）より
壁田	昔々、赤茶色の粘土質の土地があり、付近の人々は、家を建てる時の壁材料として、その赤茶色の粘土を使用していた。どの壁土の採取地でもあったし、田も畑も一帯が粘土質の地形であった。その土地柄から壁田の地名が俗称となり、後に地名になったといわれている。 （ふるさと学習資料委員会 編集委員 金正美氏）より
小渡	順徳天皇が沖庭峠を越えて、荒川をお渡しになったと伝えられており、それにちなんで御度（おど）といったのが、後に小渡となったといわれている。 （ふるさと学習資料委員会 編集委員 金正美氏）より
越中里	昔、人々の一つの集団が小国町に住んでおり、その人々が今の生活よりもっとよい生活環境があるかも知れないと思い集団移住することにしました。そしてその人々は現在北部といわれている所により場所はないかと求めていき、美しい山々を眺めたり、山菜をとったり清き荒川のせせらぎを聞きながら北上していくと、とてもながめのよい所に出ました。そこは荒川の対岸で魚は豊富にすみ、山は近く、生活する場所としては申し分なく、荒川の真中には中州（中島）があり、それを越えて対岸に渡りつき、この土地に自分達が住むことを決めました。荒川の中島を越えて、新しい土地を求めたということから「越中里」といわれるようになった。 （小国郷の伝説集）より

(2) 昔物語について

1 語り部さん

- ・ 後藤弘子氏（小国町の語り部）に語りを披露していただきました。

話「小国郷長者原 とよゐのむかしかり」より

きつねのほうしょうの玉

昔あったけど。やれ昔、越後の安田ていう所に「せんにむ」という家あったけど。じいと、ばばの二人暮らしであったど。

ある日、爺は山さ木 切りにいって、昼飯食って一服していたば向うの方から、きつね何か白い物くわい【啞えて】でくるから、じさ【爺】は木の陰さ隠れて待っていたどやれ。じさの前さ来た頃、「やあっ」といってじさとび出はった【飛び出た】じもの。そうしっど【そうすると】、きつねのちくしょうたまげて、【小狐は驚いて】「くわえーん」と一声吼えて、とび上 がったど。その時、きつねは、口さくわえった物おどして【啞えていたものを落として】、一目散に山さにげで【逃げて】いってしまったどやれ。

じさ、その白い物拾ってみだば、何だか毛のかたまりのような物だじもの。

「これこそきつねのほうしょう玉だなあ・・・」

と思って家さ持って来て、ばばと二人で、誰にも見せないで、しまっておいだど。

きつねの方では、大事な玉をなくして、人をだます事もできなくなってしまつて困ったじもの。うまいあんばいにばけらんなくて【上手に化けることが出来ずに】、どうしたらいいがど、二、三日考えだど。そのうちに考えついたじもの。じさの娘に子供生まれる事さ気づいたきつねは、村の若いもんにはばけて安田の家さ来たど。そして若い者の言うには「じさじさ娘子お産始めだど。なかなか難産で、子供もてないがら占ってもらったば、これは、じさの持っているきつねのほうしょうの玉をなめさえすればすぐ子供は生まれるって言わっただがら、はやく、それ持って行ってくれ。じさ足がおそいがら、おれ、それ持って先に行くから、じさ後からゆっくり来いちゃ。」ていうど今まで誰にも見せた事のない、ほうしょうの玉を出してきて、「はやく、はやく、走って行ってくれ。おれど、ばば、ゆっくり行くから。これなめさせたら、おら行くまでに、孫が出ているがら。」と言って、べろりきつねにだまされでしまつて、宝物はなしてしまつたじもの。じさとばばは、娘の所さ行つたば、たまごに目はな付けたようなめんごい子【かわいい子ども】が生まれたとて、大喜びのところであったど。

「早く、じさだいてみれ」【じいさん抱いてみろ】

っていうがら、じさがら先にだいて、こんどは、ばばにだがせだど。ばばは、

「じさそっくりだ。」って言うじもの。

「いや、いや、この子は、ばばそっくりだ。」

って言って二人でやるから、とるやら【代わる代わる】何べんもしている内に、子どもだち来たじもの。一人の子供は、橋の下をのぞくと、じさとばば二人で、まるこい石をやったりとったり、「じさににた」「いや、ばばににた」と言っていたけど。

あんまり子供にわらわだば【笑われ】、はっと目がさめたようだけじか、橋の下にいで、石ころ、やったりとったりしていであつたど。

「やれやれ、きつねにあだかえされた」【仇をかえされた】

と言って、家き帰ったば、ほうしょうの玉がながったど・・・。

きつねのあだがえして、まことにおそろしい。

トンピンカラリン虫くった。

初めてお聞きした本物の【語り】に驚きました。後藤さんの身振り手振りで語られるその話術にとっても引き込まれました。特に地元の方言で語られる昔物語はとても身近に感じる事が出来て、その言葉はとてもあたたかく、子どもからお年寄りまで、聞くに楽しい話が数多くあり、そこから当時の生活背景も感じる事ができました。また、紙芝居のように作り手の創造する背景が、絵とした情報として入ってこない分、その背景の余白を想像して埋めることができる。そんなことがより心に響くのではないかと思いました。そして、それはフィクションとノンフィクションの境さえあいまいにする作用も秘めているように感じました。この物語の元の話し手であった（故）佐藤とよゐさんは明治35年生まれで小玉川（南部）育ち。小国町を代表する語り部のお一人でもありました。後藤さんに語りの本を見せていただきましたが、それは出来るだけ生の口調を再現するという意味から文字にすると読みにくい部分もあるそうですが、【語り】に忠実に話し言葉だけの文章になっていました。



小国の語り部、後藤弘子氏の【語り】を聞く



ジェスチャーを交えて語られる【語り】

宝幢院のものとされる木板の写し

「宝憧の玉」から、昔、宝憧院という名の寺があった事実をお聞きし、調べてみるとこんな話
しもあったことがわかりました。

宝憧院について（小渡）

小渡 集落の下に坊様庭敷と呼ばれる畑があるが、昔ここに宝憧院という寺があった。

ここの和尚は毎朝、貝少川の宝憧院滝（その名は今も残っている）で水垢離をすることを業に
していた。ある朝いつものように水垢離をしていると滝壺の中から河童が出て来て和尚の生き肝
を抜こうと肩に手をかけた。すると和尚は河童の手を肩に固く挟み、知らないふりをしてお寺に
帰ってしまった。

河童はどうしても逃げる事が出来ないのとうとう和尚に謝った。

そして、今後は決して小渡の子どもをとらないし、また川で命を落とさせるようなことはしな
いという証文を和尚に渡すことで、河童は川へ帰してもらった。それからというもの、小渡 集落
は川端にありながら子どもが川で死ぬことはなくなったと云われている。

河童と狐の違いはあるものの、人をだますことに長けている（と云われている）両者は今まで
聞いた小国の昔物語にも頻繁に登場しています。

宝憧院はいつ無くなったか明らかではありませんでしたが、不動明王供御礼宝憧院、奉読諦仁
王般若経如満足仮と記した木版（2頁右下写真：写し）は存在することがわかりました。

2 昔物語収集

小国町は鶴岡市（庄内）の合併前までは、山形県全市町村内での面積は県内一位でありました。
そしてその広大な土地の9割以上を山林地帯が占めているため、自然豊かな環境条件の中で身近
にその偉大さに触れることができます。それゆえに昨年のレポートでも紹介した一遍（玉川太郎
の投げた石：玉川集落）にも似た自然に関する昔物語も北部地区にはありました。

八幡太郎の投げた石（舟渡）

舟渡 集落の方にある、屏風岩山の所に八幡石という（直径6メートル余りもある）大きな石があ
る。その石は源八幡太郎義家という人が、自分が大力を持っていることを誇って、みんなにこの
大力を示そうとこの大石を縄で背負い、舟渡 集落から屏風岩山の裏側集落（現在、金丸という集
落がこの集落かと思われる。）まで持って行こうとした。そして大きな縄でその石を背負い、ぐ
んと立って屏風岩山に登り始めた。しかし屏風岩山の頂上に着こうという寸前で、茂っていたつ
るに引っかかり足をたいそう痛めてしまった。（つるは直径10センチ程の大きな葉を持ち、辺
り一帯をはっていた。この葉を地元では俗に「肥っ葉」と呼ぶそうです。）足を痛めた為にその
大石を二度と背負う事ができず、その大石をそこに置いて、残念そうに足を引きずりながら帰っ
てしまったという。この大石は今もそこに置かれてあり、源八幡太郎義家が縄をかけ背負ったこ
の大石には今でもその時の縄の溝がくっきりとついていると云われています。

源八幡太郎義家とは昔、蝦夷征伐に來た軍であり、特に、安部貞任一族（安倍とも表記してい
る書物もあり、記載の通り表記します。）との戦いに関する言い伝えは北部地区に多いことがわ
かりました。また、文献を探てみると舟渡のこの石に関する昔物語が他にも存在しました。

舟渡の八幡石にまつわる話（舟渡）

小国町と若山集落の間に金毘羅様という山があり、この金毘羅様の川の下に、通称「釜の淵」と云われているところがあったそうです。

その淵の真中にぽっかりと浮いたように大きな岩があります。その岩は八幡太郎義家が安部一族との戦いの時、金毘羅様の頂上から、投げ落した岩と云われています。

「小国の民俗風土記」より

八幡石（若山）

若山集落より約1キロメートル離れた所に大石があります。

その大石のまわりには小さな川が流れています。この大石のある側一帯が沼になっていてそれはとても深く、沼は曇った目などはいかにも悪魔が出そうな錯覚に陥りさえさせられます。鎌倉時代、八幡太郎義家が沖庭山に登って東方の山を望み自分の力をたよりに、ここの大石を向こうまで投げようとして、足をふんばり大石を持ち上げ力一杯投げました。大石は、大きなうなりをあげながら大空を魔物のように、東方の山の一番手前の今の金毘羅様の山に当るかの様に見えたが、途中この若山の現在の位置に半分以上も土にめりこんでしまったそうである。それからいく日も経ちこの小川の淵に沼の様になり現在にいたっている。

「おきにわ」より

八幡石の由来（越戸）

昔、源八幡太郎家が安倍一族と戦いをした時のことです。

安倍一族に追いかけられた八幡太郎義家の軍は越後（新潟県）の八ツロから小国町の小渡に通ずる道を、一生懸命後ろを振り返りながら逃げてきました。

そして越戸を通り過ぎる頃には、義家の軍はすでに息は、きれぎれに足は棒のようになって、とても前進出来ないような状態になりました。

越戸から少し小国側にある前坂という所に来た八幡太郎義家の軍は、後ろを何度も何度もふり返り「ここまで来れば安心だ。敵はまだ見えぬようだから、一休みして行こう。」

と近くにあった丁度いい石に腰をおろしました。

敵が来たらいつでも逃げられるようにと、多数の部下を見張りにつけ、自分も自ら敵の方向をじっと睨みつけていました。

しばらくの間そうしていると、家来の一人が、「敵がみえてきたぞ」と大声でどなりながら、八幡太郎義家の所にやって来ました。

「そろきた、皆早く準備せい。」

と八幡太郎は休んでいた石から素早く立ち上がり、そして小国の方に向かって逃げました。

それ以来、この八幡太郎義家の休んだ石を人々は「八幡石」と呼ぶようになりました。

またこの八幡石をよくみると、ところどころ凹んでおり、これは八幡太郎が休んだ時に、その重さで凹んでしまったと言う人もいます。

じしやからの木 の話（綱木）

八幡太郎義家が奥州の豪族である安部一族を征伐するためにやってきた時のものです。

小国町大家綱木の箱の口集落の中間にさしかかった義家の軍は、この2つの集落の間にある峠を越えようとしていました。

おりしも、冬将軍が容赦なく吹き付け、義家の軍の全身は遅々として進みません。また兵隊は疲れ果て、食料は残り少なくなり、朝廷とのれん楽は思うようにいなくなり、悪戦苦闘していました。それにもまして東北の冬は厳しいものです。特に小国地区は日本でも有名な豪雪地帯。だから八幡太郎義家を始めとする彼の部下はいかにして前進しようかと考えておりました。

しかし折からの深雪のため、ついに腰までうまり、弓を捨てるもの、脱落する兵も出てきてまったく動きがとれなくなりました。山々もうっすらと暗くなり、さすがの義家の顔にもあせりの色が表れてきました。そしてついには「ううむ、どうしてくれようか。」とため息まで出てきました。

そのような状態にみんなががっかりしていると、先程から一人で何か熱心に考えていた家来の一人は、何を思ったのか突然ポンと手を打って「そうだ、これがいいぞ。」と腰の刀を抜き、自分の近くにあった、まっすぐに伸びた三尺位の木をすっぽりと切り取りました。まわりの兵隊は何をするのだろうと興味をもって、彼の仕草を見つめておりました。

木を切った家来はそれを少しずつ曲げて大きな楕円形の円をつくり、それをつるでしばり、「かんじき」を作りました。

（かんじき・・・冬、雪の上を歩くときに長靴の底につける直径30センチほどの楕円形のもの。これを履くと雪にぬかることなく歩くことができる。より、歩きやすさ・軽さを追求してつま先を中心に踵を上げる事ができる「外国版かんじき」がスノーシューという名前で市販されており、現代では冬場のレジャー（スノートレッキング）などで利用されています。これは雪の上でも走ることができるすぐれものであります。）

それをさっそく八幡太郎義家の前に持って行き、その前で足につけて、深雪の上を歩いてみました。義家が見てみると、今まで腰までもぬかって歩いていたのだが、それを履くと足首までしかぬかりませんでした。それを誇らしげにはいて歩いている家来を見た義家は「おおっ、なんといいものを考えついたものじやのう。」と言いながら、こんどは義家がつけて歩いたところやはり中々歩き良いものでした。これはすばらしいものだど八幡太郎はすぐに家来に命じて、木を探させたくさんの「かんじき」を作りさっそく峠を登り始めました。そしていよいよ義家の軍は峠にさしかかり、「そら、もうすぐ頂上だぞ。」と最後の力をふりしぼり、おもいっきり力を入れた時です。突然八幡太郎義家の履いている「かんじき」がポキリと折れてしまいました。

生まれながらにして気の強い八幡太郎義家は、大変腹を立て「もうすぐ頂上だというのに縁起が悪い」と壊れた「かんじき」をその峠から力一杯投げてしまいました。

この時から、現在でもこの峠から小国側には、この時に使用したといわれる「じしやからの木」は沢山あるが、この峠の向こう側（綱木）方面には「かんじき」に使う「じしやからの木」は少ないと云われています。また、これ以後このあたり一帯で用いられる「かんじき」のほとんどが「じしやからの木」で作られたものだそうです。

赤はげの話（古田）

小国町古田集落の南方に、赤はげと言われている場所があります。この場所は、山の斜面がくずれたようになっており、山肌は赤色がかかっております。昔、源八幡太郎義家と安部一族との間に戦いがあった時に、八幡太郎義家は山向いの金毘羅様に陣取り、安部一族は、この赤はげに陣取って、弓を引き合い、刀をふりまわして、戦いをしたと云われています。戦いは、安部一族の不利となり、安部一族は、ついに逃げなければならなくなりました。その時、八幡太郎が追討をかけたところ逃げる安部一族の者が足をふみはずして、その山の上から下の川に転がり落ちたと云われています。それと同時にあまりに大勢のため、山の表面は崩れてしまったという事です。その山の上から転がり落ちた馬や人の血が、その崩れた山肌の土にすっかりしみ込んで、あの赤い土になったといわれ、それ以来この土地を誰ともなく赤はげと呼ぶようになりました。

矢種 沢の話（矢種 沢）

昔、蝦夷征伐に來た、源八幡太郎義家の軍と安部貞任一族の軍とが戦いをした時の事である。源八幡太郎義家の軍は現在の小国町若山集落と古田集落のほぼ中間に位置する金毘羅山に陣取りました。また敵の安部一族は、川（現在の金目川）をはさんで向い側の赤はげという場所に陣取りました。そして、互いに弓を引き合い、激しい戦いとなりました。敵の安部一族の打った矢がうなりをあげ、激しく空中を飛んで來ました。その時、源八幡太郎義家は驚きもせず、軍の先頭に立ちただかって、不思議な術を使った。すると、その時突然、ゴウゴウと強い風が吹きあれ敵の打ってくる矢は、自分の軍陣から反れて別の方向の沢の中に入ってしまい、味方の危機を救い、一箇所に飛んでいって近くの沢に落ちたと云われています。その後この沢からしばらく矢が発見されず、「矢をたねる」という意味で、弓の矢が落ちた場所を矢種 沢と呼ぶようになったと云われています。尚、この沢は現在でも矢種 沢と呼ばれています。金毘羅山の上の岩にある小さな窪みは義家の馬の足跡と伝えられています。

同じようなこんな話もありました。

金毘羅山の話（古田）

古田の集落の入口の左手にある小高い山が金毘羅山である。昔この山に八幡太郎義家が立籠り、西方の山に安部貞任を迎えて戦ったことがある。その時互いに弓の射ち合いをしたが、義家が金毘羅山の上で術を使うと、貞任の軍の矢は金毘羅山からそれで隣の山の沢の中へことごとく飛んでいった。

その後この沢からしばしは弓矢が発見されたので、矢種 沢と云われるようになった。

金毘羅山の上の岩にある小さな窪みは義家の馬の足跡だといわれており、義家の家来がこの地で馬に煮た豆を食わせたら、馬は藁の中へ豆をこぼした。

それから数日たってその豆を見つけたところが、豆からはすでに白い糸が立って納豆になっていた。これが納豆のおこりであると伝えられている。

この納豆の話の詳しい昔物語が違ふ本に記載されていました。

納豆の話（古田）

昔、現在の古田集落において源八幡太郎義家と安部一族の間で戦いをした時のお話です。先ほどのまでの激しい戦いも夕暮と共に次第にひっそりとして来て武士達は、ほっと一息つきました。

源八幡太郎義家は味方の陣地をゆっくりと一回りして歩きました。馬は連日の戦いで疲れてしまって、ぐったりと元気なくつながれていました。

源八幡太郎義家は馬を見まわしておりましたが、やがて馬の側に近寄ると「これは、これは、連日の戦いでさぞつかれた事だろう」と鼻づらをやさしくなでてやりました。「これ馬番、馬はたいそう疲れている様だ、可愛想にこのままでは、やせおとろえてしまうぞ。」「はい、私も大変困っているところです。どうしたら良いものでしょうか。」「ウーム、そうだな、豆でも沢山煮て食べさせて、元気をつけさせる事だな。それから、大変疲れているようだからゆっくり休ませる事だな。」

馬番はさっそく、大きななべに豆を沢山煮て、桶に入れて馬に食べさせました。馬は最高の御馳走だと喜んで食べていました。そのうち、席をちよっとしたはずみにその煮た豆を、桶もろともに、しきわらの上にひっくりかえしてしまいました。そんな事とは誰も気がつかず夜になり、そして一夜が過ぎました。

さて、次の日、馬番が馬に朝飯を食べさせようとした時です。昨日、馬がひっくりかえした豆はそのままひっくりかえっておりました。桶を見つけた馬番がなにげなく桶をおこそうとすると、その桶の下の方の中から、何ともいえない旨そうな匂いが流れてくるではありませんか。馬番は「このすばらしい匂いはなんだろう？」と静かに桶の下の方を広げて見ますと、それは昨日こぼれた、煮た豆だったのです。

「ずいぶんうまそうな匂いがするものだ」と馬番はその豆をそっと手に取ってみますと、ねばねばした無数の糸が豆からたっていました。鼻の近くまで持ってきて匂いをかいでいた馬番は「こんなうまそうなおいのするもの、きっと人間が食べられないわけがない。」と一粒、口に入れてみましたが。それがまた非常に美味しいのです。馬番は「これはうまいぞ」とつい大声をあげてしまいました。

突然の馬番の大声に何事がおきたのだろうと、源八幡太郎義家を始め多くの家来達が馬番の所に集まってきました。馬番からこのおいしい豆のことを聞いた源八幡太郎義家や、集まって来た多くの家来はその美味そうな匂いを嗅ぎながら、さきほどの豆を囲んで覗きこみました、みんなそれぞれ豆を口に入れました。なるほど、とても美味しいのです。みんなはあまりの美味さに口をそろえて、「ナント、ナント、ナント、ナント」といって感心しました。

それからこの食物を人間が食べるようになり「ナント、ナント」と驚いたことからナントウ・ナットウと呼ばれるようになりました。

これが「納豆」の始まりだと昔から古用集落に伝えられています。それから農家では煮た豆をわらにつつま一定の温度を保って二昼夜ぐらいおいて「納豆」を作っていたそうです

生活には必要で、重要な役目を果たしていた馬や牛は、より身近な存在であったためか頻繁に小国の昔物語に登場します。隣村の金目でも馬に関する話がありました。

また、農作物が豊かなこの土地では食に関する話も存在しました。

幻の馬の話(金目)

昔、山また山に囲まれた金目集落の夜の出来事。夜もふけ集落中が寝静まった頃、集落の一人の若者が、せっせと夜仕事をやっていました。仕事を終った若者は「どれ仕事もちょうどきりがついたから寝るとするか。」と一人ごとを言いながら、戸締りをしようとして外に出た時です。若者は、なにげなく満月の光に照らされた集落の近くの山に目をやった時、突然その山の裾を、ボーと幻のように一頭の白馬があらわれました。「おや?何だろう、今頃の時刻にまさか、夢なのだろうか」。と不思議に思いながら幻のように現れた白馬をじっと見ていると、今度は、幻のようにボーと消えていくではありませんか。若者は驚きました。「これは、どうしたことだろう、白馬が現れたり消えたりして・・・」と薄気味悪くなってきました。しかし、人間というものはこうなると、その正体を知りたがるものでこの若者は一層その事に興味が出てきてその附近をじっと見まわしていました。すると今度は、さきほど山のそでで幻のように消えた、あの白馬が山の頂上にボーとまた幻の如く現われてきました。そして、じっと集落を見下ろしていました。さっきから見ていた若者は「これは何ちゅう事だろう、白馬が山の下に現われて消えたと思ったらこんどは山の頂上に現われて、そしてこっちを見てやがる」と一人ごとを言いながら見ているとボーと白馬は幻のように消えて見えなくなりました。若者は、今度はどこに現れるのかとあちらこちら見まわしたが、その晩は現われませんでした。次の日若者は昨夜の不思議な出来事を、村の人々に話しましたが、村人達は「夜の夜中に白馬が現われて消えたと思ったら、山のてっぺんに現われるなどんでもない。おまえは寝ぼけて夢でも見ていたのだろう、人を驚かすにもほどがある」と誰一人として信じてくれる者はありませんでした。だれにも信じてもらえなかった若者は、「そうだ、もしかしたらまた夜になると現われるかも知れない。」と次の晩から夜が更けてくると、じっと集落の近くの山々を見まわしつづけました。次の日も次の日も、しかしついに白馬は現われませんでした。そして数日たって、また満月の夜、若者はじっと山を見ていると、最初の晩のようにボーと白馬が現われてきました。消えては現われ、現われては消えながら、じっと集落を見下ろしていました。

若者はその白馬を見ながら「やつめ、満月の晩になったらまた現われたな。あいつの正体は一体なんだろう」とつぶやきながら見ていると、その馬は突然大声でいなくなりました。すると集落に突然不思議な事がおこりました。というのは今の一声で集落に飼ってある馬という馬が突然狂ったように動き出し、馬屋から飛び出す始末です。

そして狂ったように飛び跳ねながら、さきほど音のした方へドツと走って行くのです。若者は「こりやどうしたことだ、集落中の馬ちゅう馬が、みな走っていくじゃねえか。」と驚いて見ていると、今度は、山の頂上に幻のように現われた白馬が空を飛ぶように山を下ってくるのです。

さあ集落中はハチの巣をつついたような騒ぎです。「おらの家の馬が逃げたよう」「おらの家の馬だあ」「あっちへ行ったぞ」「そら、山の上からおりてくる白い馬に向かって走って行くじゃねえかあ」と集落中の人達が外に出てきました。

小屋から逃げた馬どもは、山から降りてきた幻の白馬を先頭に狂ったように田畑かまわず集落中をかけ走りまわりました。集落の人々が見ている中を一晩中走りまわり、夜明け近くになると、今まで先頭になって走っていた白馬がボーと消えていきました。

するとどうしたのか、今まで狂ったように走りまわっていた馬々は、何事もなかったような顔をして自分の家に帰って来たのです。さて次の日集落の人々は大騒ぎです。夕べの白馬のおかげで田も畑もめちやくちやになってしまったのです。「ああ、せっかく実ったのに、相当だめになってしまった。」という声があちらこちらで聞かれました。それから後の満月の日も幻のような白馬は現われ集落の田畑を荒らしまわりました。集落の人々は、満月の度にこんなことが続いては、とんでもないことになってしまうとさっそくみんなで相談しました。その結果、いつもの馬が暴れて走りまわるところに石をならべて「ませ」を作ろうということに決まりました。次の日から早速その工事にかかり大きな石をならべて「石ませ」を作りました。

それ以後集落はこの幻の白馬からの害は免れ、再び平和がやってきました。そして、それ以後

この石で「ませ」を作った場所を誰からともなく「石ませ」と呼ぶようになったと云われています。尚、現在もこの「石ませ」には大きな石がごろごろし歩きにくくなっているそうです。

(みちのくの民話)より

あずき取りの話(折戸)

小国町北部の「折戸」に「ほうの木沢」と呼ばれる沢があります。昔からその沢には昼でさえ暗くさみしい場所と云われている所がある。ある時、折戸集落一帯に奇妙な噂が流れはじめました。「ほうの木沢を一人で通ると正体の知れないバケモノが出る」というのである。バケモノというのは通る人に、どこからともなく「モチ米あるが、あずきがない」「誰でもいいからあずきくれ」と歌うように話しかけてくるのだそうです。しかしそんな噂が流れても村人は信じることもなく噂話を聞いていました。ところが噂が流れて間もなくのある日の事。一人の若者がどうしてもほうの木沢を、あずきを持って通らなければならない用事ができてしまいました。その若者は臆病で非常に気の小さい男でした。あずきの入った袋を肩にかついで、ほうの木沢にさしかかった時には、陽はすでに暮れ、うすぐらい夕暮となっていました。昼間でさえさみしいといわれているほうの木沢を薄暗くなってから一人で通るのですから、なんともいえない不気味さが若者の心を誘いました。最近集落に流れていた噂を思い出しては小走りでその沢を通り抜けようとしたのですが、突然山のどこからともなく「コラまてえ」という奇妙な声がして、小走りの若者の足を止めました。若者は「そら出た」と思い、とっさにあたりを見まわしたが、なんの姿も見えませんでした。そのうちに前から、噂で聞いていた歌ともお経ともいえぬ不気味な声が流れてきました。「モチ米あるが、あずきが無い。」「誰でもいいからあずきをくれ。」「あずきをくれ。」と言っているのです。若者は驚くあまりに、あずきの袋を肩にかついだまま懸命に走って逃げようとした。ところがいくら走っても「あずきくれ」「あずきくれ」とその不気味な声は若者を追いかけてきました。若者はどうしようもなくなり、肩のあずきを袋がらみ沢に投げ入れて「俺の持っていたあずきは、いま沢に置いたから命ばかりは助けてくれ」と大声で叫びました。すると不思議に不気味な声は、ぴたりと止まりました。若者は一層の気味悪さに一目散に逃げ帰りました。翌日この話を集落の人々に告げました。その話を聞いた村人達は若者の案内で、昨夜バケモノが出たという、ほうの木沢の場所に行ってみました。するとなんと驚いた事にその場所には、袋いっぱいに入れておいたあずきは一粒もなく、空になった袋だけが昨夜と同じ場所に投げられてあったそうです。それ以来、あずき取りの噂は村人を恐ろしくさせ、あずきを持った者は、ほうの木沢を通らないようになったということです。

樋ノ沢の沼さんべに伝わる話（樋ノ沢）

北部の樋ノ沢に、通称「さんべ沼」と呼ばれる沼があります。そのさんべの沼の精は大きなどじょうだと昔から伝えられ。そのどじょうは水や沼の付近を荒らされることを非常に嫌っているそうです。ある時、そんなことを知らない集落の若い者達はその沼に石や土をたくさん投げ入れました。すると今まで晴れていた空が突然曇り大雨が降り始めました。どうしたことかその雨は何日も何日も降り続き、その地方一帯が大洪水になったということです。

そのため、その地方の川沿いや田畑はその年、米や穀物が全然とれなかったそうです。それ以後村の人達は「さんべの沼に石や土を投げると、さんべ沼の主の、どじょうが怒って大雨を降らせると云われるようになりました。

きゅうりの話（板倉）

昔、板倉という集落には、大変きゅうりの好きな天応様という神様がおりました。

昔から、きゅうりをいろいろな方法で食べられておりましたが、文化の発展と共に生活が豊かになってくると、人々は珍しいものだけを求めて贅沢な生活をするようになり、きゅうりなどという野菜は、以前のように食べなくなりました。

そして板倉集落の人々は、きゅうりを食べたとしても半分食いにして投げたり、充分熟さないうちに放って捨てたり、また長い間置き忘れて腐らせたりする。などあまりにもきゅうりを粗末に扱うようになりました。これを見たきゅうりの好きな天応様は、たいへんお怒りになり「これでは人々の生活が贅沢すぎて墮落していくばかりだ。少しこらしめてやらなければならぬまい」とお考えになりました。そして天応様は、この集落にきゅうりを作ることを禁じてしまいました。

しかし板倉集落の人々は、きゅうりを作ることを禁止されても何不自由のない平和な生活を送っておりました。それから数十年も経ち、そんな昔の言い伝えがすっかり薄れてきたある年、集落の一人がその掟を破り、畑にきゅうりの種を蒔いてしまいました。3ヶ月が経ち、それはそれは、みずみずしい、とてもおいしそうなきゅうりがたくさんなりました。そしてその村人は、さっそくカゴ一杯にとってきて「これは美味しい」といって食べたところ、急に腹をかかえて苦しみ出しました、薬を飲んで寝てはいましたが、いっこうに良くなりず病気は悪化をたどるばかりでした。そしてついにその人は年の暮れに死んでしまったということです。これを知った村の人々は「天応様の掟を破った祟りにちがいない」と恐れて、それ以来この村には、誰一人としてきゅうりを作る者はいなくなりました。

その後、長い間「きゅうり」の作らない時代が続き、板倉集落では他の土地で作ったきゅうりは食べて良いが板倉集落内にはきゅうりを作ってはならないという風習が続いているそうです。

日本のエコロジカルフットプリント（地球環境にかけている負荷）によると世界中が日本人のような消費生活を行った場合（資源を生産する土地・廃棄物を吸収する能力を考えた場合）地球が2、3個必要であるとの記事を読み、日本は輸入資源に頼り資源を持っていない事を自覚しておきながら、どうしてこんなにも無駄な消費をする生活をおくるのだろうと考えたことを思い出しました。そんな警鐘ともとれる話は昔からあったことを知り、その抑止力といえる物は、昔は「信仰的なもの」から現在は「食の安全」へと変わったような気がしました。

一方、家畜として飼われていた、鶏（鳥）に関しては次のような話もありました。

金色のにわとりの話（金目）

昔、金目集落は、天候に恵まれ、人々はたいへん一生懸命働いたので毎年豊作が続き、幸せな生活を長い間送っておりました。そんなある年の事です。突然あたりが暗くなったかと思うと、ものすごい大雨が降り出し、これが何日も続きました。この悪天候のために、その後虫やうじがわき出て、それがもとで悪病がはやり出しました。人々はもがき苦しみ、働くことが出来なくなったために農作物が全々とれなくなり、人々は、困り果てた末に家宝であるものを持ちより神様にそれを奉納し何度も拝みましたが何の効果もありませんでした。そしてその年はとうとう凶作で暮れてしまいました。食べ物がないために、老人や子供達は、次から次と餓死するありさまでした。そうしたある日、目も開けていられないほど西の空が黄金に輝いたかと思うと、そこには一羽の美しい黄金のにわとりが現れました。村人達は、あれよあれよと空を見守っていました。その美しいにわとりは、突然集落に舞い降り今までたくさん、はびこっていたうじや他の虫を食べてしまったということです。そのため村人の病気はすっかり回復し、人々は以前の幸せな生活を取りもどしました。集落の人達は、これも金色のにわとりのお陰であるとし、それから後に神として祀りました。それからというもの、金色のにわとりが集落全体を救ったのだと信じられ、その後、金目ではにわとりの肉や卵を食べなかったと伝えられています。（集落以外の他からもってきた卵は食べても良いといわれている。）その時祀った、にわとりを描いた掛け軸が今でも集落の家に家宝として残っているといわれています。

「鶏肉を食べない」理由としてこんな話もありました。

洛の里の話（金目）

平家が敗れた時、三条郷の斎藤孫右衛門と孫兵衛という兄弟が、金目川の上流、不動沢という所に隠れ住んだ。彼等は主に狩猟を営んでいたが、多少の耕作も行ったらしく、不動沢のほとりのザイショノタイラというところには畑の跡が残っているそうである。時は経ち後に不動沢から3里ほど下流の今の金目に移住し、そこを開拓した。孫右衛門は敬神家で人望もあったので、そこに家を建てる者も出てきた。集落の者は農耕と共に山の生活を営んでいたので村の神を鎮守として祀った。又、孫右衛門は、元の住家のあった所に不動院と称する祈願堂を建てた。そこの岩壁には大人ほどもある不動尊があり、金目の人たちは毎年旧の8月9日に参拝した。孫右衛門はある時、旅に出た。（キリシタンの信者の嫌疑を受けて捕えられたとして記された物もあります。）その時、村はずれまで見送ってきた人々に（「金目村は自分のいない後に、洛の里になるかも知れないため気をつけなければならない」と言われていた。）留守になる旨を告げ発った。その後孫右衛門からはなんの音沙汰もなく2年の年月が過ぎた、その年の秋のことである。孫右衛門の言う通り、沢山の貉が現われ農作物荒し家畜を襲った。孫右衛門は3年目にようやく村に帰ったが、貉に荒らされ困窮している村を見て自責の念から断食祈願を決し不動院にこもり、家伝の祭文を紐解き一心に祈願した。するとそれから7日目に雷雨が起り、一夜のうちに貉どもはことごとく死んでいった。それから金目村は平穏な里に戻ったがこのことがあって以来孫右衛門は洛の棲息地に鶏は禁物であるというので、村人に鶏を飼うことと鶏肉・鶏卵を食用にすることを断じて禁じた。村の鎮守に鳥居のないのも鳥に因んだ一切のものを嫌うゆえんであるという。

孫右衛門の神通力の話には、続きと思われるような次のような話もありました。

蛆が沢の話（金目）

金目集落の飲料水の源をなしている沢を蛆が沢（俗にウンジャ沢）といっている。孫右衛門が神通力によって殺した貉の死体には、この沢のあたりに沢山ころがって蛆が湧き、飲料水を汚すので村人は困惑した。その時、孫右衛門はまた不動院にこもり、祭文によって祈願したところが、それから7日目の朝、村に一羽もいないはずの鶏が鳴き、その夜に金目川の水が逆流して、蛆の湧いた貉の死体をきれいに流し去ってしまった。そうである。

蛆が沢の名はこれに発するものであるし、金目村に鶏の声がすると、それに引続いて何か不思議なことが起こると伝えられているのも、それに起因しているという。

山深いこの土地では、山岳信仰が存在し、信仰に関する話も多く存在します。

祭文の話（小渡）

孫右衛門は、祈願に用いた祭文の神通自在なのに驚き、子孫への影響を怖れてその中の二巻だけを残し、他の恐ろしい祭文は庭先の大石の上で焼いてしまった。この大石は、「祭文焼捨の石」といって、今も孫右衛門家の庭に残っている。焼け残った2巻の祭文も不思議な神通力があって、その後もよく人々を災害から救った。旱天の際には他村からも雨乞いに頼まれて、孫右衛門家の主人が、祭文をたずさえて出かけることが近年に至るまであった。又、明治42年の火事に、当時11戸の金目集落は6戸が全焼したが、そのとき孫右衛門の主人は、祭文をひも解いて祈願したところ、孫右衛門家の屋根には、たちまち雲が湧き、軒からは雨滴がたり、いくら火が飛んで来ても燃えうつことはなかったという。

禁忌の話（金目）

金目集落では鶏を嫌う外に、産や死の「穢れ」（けがれ）を忌むことも甚だしく、特に火の混交が嫌われている。「穢れ」のある者に対しては、煙草の火は火鉢に取ったりして別火にして使用させ、お茶や爛酒を飲ませるには、一杯ごとに茶碗や杯を洗うか、又は拭いて使用する。飯などは一度盛ってから他の茶碗に移して食べさせるという。但し、肉親の間ではそうではない。又、「穢れ」のある家に訪問した時などは、塩で身を清めてから自宅に入るそうである。

電権（いかづち）現神社由来の話（古田）

天明初年の頃（約180余年前）古田村久右エ門家の三男、寅之助という若者がおりました。ある日、市野沢に仕事にいかうとして、市野沢の堰あたりまで行ったところ、空全体がにわかに曇り閃光がひらめき大音響とともに彼の頭上に落雷した。彼はその場に投げ倒され、気絶しましたが、やがて正気にかえり起きあがりあたりを見わたしたところ一面が焼け野原になっていました。寅之助のからだにはカスリ傷ひとつもありません。ただ傍らに珍しい石が1つ落ちていました。その後、家に帰りこの事を話した彼は、今更のように落雷の恐ろしさに身が縮むとともに、一命を取りとめたのは、これこそ電神の加護によるものだ信じ、拾った奇石を御神体としてその場（セキ場の上）に祀ったそうである。これが電権（いかづち）の始まりと云われています。

長田の観世音の話（小渡）

昔、小渡の長五郎という者が、朝早く田の水をかけに行くと、田の中に光るところがあった。何か埋っているに違いないと思い鍬で掘るとカチンと音がして金の観音像が出てきた。

長五郎は、持ち帰って屋敷に安置した。しかしそれから長五郎家には子どもが育たなくなったという。それは観音様の傍で子どもが遊び不躰な振る舞いをするからであろうと云われていた。

寛政11年（西暦1799年）一子が死亡したので、その子どもを葬ると同時に観音様を針生の吉祥寺へ納めた。小渡地区の長田から発見されたので長田の観世音という。以来、観音様が発見されたこの地では、化学肥料以外の肥料は一切入れないで耕作しているそうです。観音像の丈は、1尺2寸で背に「西泉」と鋳物師の名が彫られている。この観音様の御開帳をする時にはどんな晴天の日でも雨が降ると云われている。

船山神社に伝わる話（樋ノ沢）

小国町北部の樋ノ沢の小高い所に船山神社が祀られています。船山神社とは、この神社の祀られているこの場所が船の形をした小高い山の上にあるからだと言う人もいます。

昔、小国郷の平野一帯には、まだまだ多くの水が溜まり、大きな湖であった時代。山の間を広々と続いている湖とまわりには、雄大にそびえ立つ山がありました。その湖水の上を、神様が乗った船が北部の中島に向い漕ぎ進んでいました。ところが船が今の樋の沢付近にさしかかった時に突然の大嵐に遭い、その場に沈んでしまいました。その船には、大事な宝物が積んであったのでした。神様は命からがら湖の岸に泳ぎつきました。一息ついて神様は沈んだ宝物について考えました。「あの重要な宝物を水の底に沈ませておくわけにはいかない」とその船が沈んでいる一帯の水を干すことにしました。それで他の神々の力を貸り、船の沈んでいるまわりに高い土盛を作りました。その結果、神様は宝物を取る事ができました。その後神様はこの苦労して作った土盛の上に神社をたてまつりました。それが現在の船山神社であるといわれています。

杉の下の話（今市）

今市集落の入口から南方に約100メートル離れた所に代神様が祭られています。代神様の近くにはあまり大きくない沼があり、そばに巨大な杉の木があります。この附近には水田もあります。

ある年の6月の朝、今市集落の大地主である人が言った「今年はいつもの年よりも、早く植えて、3日で終さなければいけない。」男達は夜明け早々に田んぼへ出かけた。一日中一休みもしないで、働いたけれども、いっこうに田植えは終らなかった。「主人に叱られるのがこわいから」と言っでは、みな一生懸命植えた。それでももう少しというところで西へ日が暮れかかってきた。その時、ある一人が西の方角に向かって、「どうかもう、ひととき（2時間）だけお日様を下さい。」と頼んだ。すると不思議な事にひとときだけ日が照りやっどの事で終わった。男達は喜んで主人の所へ帰った。しかし、意地の悪い主人は、「今日1日かかっても終えないのにどういう事だ」と不思議に思った。あくる日、主人は昨日植えた所を見に行った。不思議な事にいくら見てもちゃんと植えてあった。しばらくして、今度は日の照りが足りなく西の空に穂が倒れて

いった。村人のある一人に頼んで、再び神様に聞いてもらったところ「東の方に大木がある。稲がたおれるのはその大木のせいである。とお答えになりもう一つ、お前達がお日様に頼んで、ひととき日を伸ばしてもらったにもかかわらずその時ばかり喜び、そのあとは何とも思っていない。そのせいでもあるぞ。」と言った。男達は、それからというものの、日の暮れる時分に、いつもお日様に向かって祈った。しかし問題はその巨大な大木である。その巨大な杉の木のために日光は遮られて近くの水田は西の方に倒れている。そこで村の人々と一緒にこの木を切ることにした。ある日、村人達といっしょに杉の木を切り始めました。しかし、大きくて木が思う様に切ることが出来ず、太陽が西の空に沈み、あたりがうす暗くなってきましたが、その木を切りたおすことが出来ないので翌日切る事にして、みんな家に帰りました。翌朝早く杉の木を切るために沼の所に行きました。しかし、たしかに昨日途中まで切ったはずの杉の木の切り口がどこにも見あたりません。村人達は驚いてあたりを見まわして見たものの、その木の切口がないのです。この様な事が何回もくり返されるので、村人達は困ってしまいました。こんどは前回よりも多くの村人をつれて行き、一日やっとの事で切り倒しました。木は大きな音をたてて、そばにあった沼の中に倒れ、沈んで影も形も見えなくなってしまいました。今までも木が沈んだと云われている田んぼの中からは時々、木の枝が出てくると伝えられています。そんなことがあり、その附近の水田を以来「杉の下」と呼ぶようになりました。

魔法のつえの話（五味沢）

小国町の北部の五味沢村は、昔から米が豊かに実る村でした。春がくるのは遅かったけれど、5月ともなれば、雪がまったくなくなり、山桜を始めとして、いろんな花がいっきに咲き乱れ、人々は、豊作を願いながら、農業に精を出して働き毎年平和に暮していました。

しかし、ある年のことです。どうしたわけか雨が降らず毎日のように日照が続きました。初めはあまり気にしなかった村の人々も、あまりにも雨が降らないので、気になり出しました。水田はからからに乾き、稲は枯れ始め、川の水は日に日に少なくなり、とうとう流れなくなりました。ついには#戸が枯れ始め人々の飲む水さえ欠乏することになりました。村の人々が一滴の水でも大事に使うようになっていた、そんなある日のことです。

ぼろ服を身にまとい、杖を持った一人の老人がどこからともなくやってきました。その老人は歩き疲れから、今にも倒れそうになりながら一人の村人にこう頼んだ。「水をくれ、のどが乾いてのう。」しかし、その頃は村人でさえ水に困っている状態で、まして他人に飲ませる水などはありませんでした。「おじいさん、おじいさん、水なんかありませんよ。」「自分達でさえ飲めないのに、他人になんか飲ませる水はないんでのう。」「勝手に探して飲んでくれ。」とかえって怒られてしまう始末でした。

老人は困り果てました。のどは乾わくし、水は無い。一人で思索しておりました。すると何を考えたのか、その老人は突然立ちあがり自分の持っていた杖をその辺の#戸に持っていき下を覗きこんでおりましたが、次にその杖で「ボン」と#戸を叩き、しばらくそこに立っていたかとおもうと、一滴もなかった水が少しずつ下の方から湧いてくるではありませんか。するとその老人はその水をさも美味そうにのどを「ゴクン、ゴクン」と鳴らしながら一気に飲みました。これを

見ていた村人達は大変驚き、そして老人に「どうか私達にも水を恵んで下され。」と頼みました。すると老人はそれを心よく引き受け、この村の人々に水を恵んだそうです。集落の人々は大変喜び、またその老人を尊敬し称えたそうです。

この時、# 戸を叩いた杖の跡が今でもその# 戸に残っていると云われているそうです。それからというものその# 戸は枯れることがなくなったその# 戸に水くみ村の人々たちは足繫く通うようになったという事です。

沖庭山権現様に伝わる話（沖庭）

沖庭山には、昔から大石があり神様として人々に信仰されています。

この石は昔、となりの村から飛んできたといわれている石です。この石のある近くにある「雨のざあざあ降る日、1人の村人がキノコを取りにやって来ました。その村人がキノコをたくさん取り、山を下りようとして、ふと気がつくところに大きな石を見つけました。「これはこれは、なんと美しい石なんだろう。」と言いながらその石に近づいてよくみると、その石は今まで見たことがないような珍しい石でした。「こんな珍しい石があるならば、この次にキノコを取りに来た時の目印のため、笠をかぶせていこう。」と一人ごとをいいながら、自分のかぶっていた笠をかぶせ意気揚々とキノコを背負い、山を下りていきました。

この人は、この美しい石が昔から沖庭山に祀られている権現様とは知らなかったのです。村人が家に帰ると、突然目がかすんできて、だんだん見えなくなっていきました。

翌日、その村人の目が見えなくなったといううわさは、あっという間に村中に広がりました。それを聞いた村の人々は、その村人に見舞いにきて、その日の様子を聞きました。目の見えなくなった村人は目の見えなくなるまでの自分の行動や昨日の山での話の一部始終を村の人々に話しました。それを聞いた村人の物知りは「それはきっと沖庭山の権現様にちがいない」「目が見えなくなったのは権現様の石の祟りにちがいない。」と言いました。それを聞いた村人は、昨日のキノコ取りに行行って美しい石に笠をかぶせてきた自分の軽はずみな行動を反省し、居ても立ってもいられなくなり「たとえ目が見えなくとも、山に登ってその笠をとろう。」と決心をしたのもつかの間、すぐに仕度をして山に登ったそうです。「権現様、権現様私は何も知らないでしたことなのです。どうぞお許し下さい。」と何度も何度もつぶやきながら夢中で這いながらも登った。あちらこちら、さまよい歩き、ついに昨日の石を手さぐりで見つけることができました。村人は急いで手をのぼし、昨日かぶせた笠を取りました。すると不思議なことに少しづつ目が見えてきたそうです。村人は喜び勇んで家に帰りました。しかし、この事があって以来、この村人の親類には、生まれてくる子どもがほとんどヒンガラ（目が見えない）になって生まれてきたと云われています。このいわれがあるので、毎年旧の8月には獅子踊りをやってこの石を祀っているそうです。この石の納められている沖庭山の御本堂の改築の時は、一週間前から魚等の生臭いものを食べず、山に登り水取沢で水を汲み身体を清め神社に登り、法院様2人で、その石を白布で巻き、上から「荒こも」でくるみ、荒なわで村の若者に背負わせて、御本堂の後に有る股木の3本股に上げておくそうです。重さは17貫目から20貫目程あるそうで、その石の近くには、壺が2つあり、1つは法印様の壺。そしてもう1つの壺には旧の9月29日に米を入れておき、翌年の4月頃に見に行き、そこで米の減っている方向が、作が悪くないと考えられています。

小国町には安産の神様として有名な大宮子易神社があります。

大宮、子易神社（大宮）

大宮神社は祭神大己貴命であり、和銅 5 年遠江国周智郡事任神社（一名小国神社）より当地（一説によると片岩）に勧誘し、「小国一の宮」とした。子易神社は祭神国常立尊、高皇産靈尊、神皇産靈尊、木華開耶姫命であり、もと小国神社と称した。元来、其の時々の領首より神封田 5 町 8 反 2 畝を賜わっていたが、永禄 2 年伊達家の臣上郡山がこれを廃した。（併し、小国大宮神主代々由緒書には、佐藤伊象守藤原家次（遠藤氏の祖先）が、永禄 2 年上郡山と心を合わせて大宮の神を再興す。と記してある）慶長三年（西暦 1598 年）上杉家の領土となったとき領主代々の祈願所と定められ、神田を寄進された。明治 5 年 4 月小国郷 7 2 ヶ村の鎮守に指定され郷社となった大正 10 年 7 月 25 日神饌幣帛料供進神社に指定された。

元来、子易とは産児の祈祷に起因するものであり、古くから安産の神として崇敬されてきた。礼祭は 8 月 18 日（旧）である。

子易神社別の説（大宮）

一説によると東置賜都高安村の才の宮の由来より始まるとされており、高安村は山に取り囲まれた奥地なので、昔年貢を納めたことがなかったそうである。文徳天皇の天安年中（西暦 857 年～858 年）にこの山奥に棲む古狸が都の役人に化けて、これまで久しく年貢を納めなかった代りであるといつて、里の娘 11 才を限りとし毎年春と秋に一人ずつ年貢に取った。そのため村には娘が殆どいなくなってしまう。村の人々が嘆き悲しんでいる時、愛宕山の地蔵権現が座頭に姿を変えて現れ、国八代郡の南宮宝菩薩から、三毛犬、四毛犬を借りて悪魔を返除せよと教えてくれた。里人は役人に化けている狸どもを酒盛に招いて、たらふく酒を飲ませ、三毛犬、四毛犬に食い殺させた。しかし 2 匹の犬も傷を受けたので間もなく死んでしまった。里人は地蔵権現の教えに従って犬の屍をねんごろに林の中に葬り、その塚の上に椿を植え、小祠を建てて、犬の宮子易聖真子両大権として村の鎮守に祀った。その祠の傍には庵を作り里の人々が代わる代わる宮守を務めた。それからというものこの宮の守護によって村には子どもがよく育ち、特に難産する者は一人もなくなったという。ある時、行脚の僧がこの庵に立寄ったので、里方のことを占ったところ「古狸の魂魄の念はまだ失せ切らない。この宮の威光によって成仏することが出来ないから益々信仰を厚くしなければならない。」と申された。里人はこの僧の徳を慕って庵主になることを誓い。それから庵の名を林照院とつけた。犬の塚の上に植えた椿の木は年を経て成木となったので、庵主はその枝を切って愛宕山の地蔵権現と、三毛犬、四毛犬の両権現の像を刻み、一つの像は愛宕山に納め、二つの像は鎮守の森に安置した。そして信心怠りなく勤めたので、里人は僧に進めて妻を取らせた。それにより林照坊と号した。林照坊は子が成人し、都へ登って醍醐院で修験の法を学び吉野へも登山し峰中権行も努めようと思いたち、その身の守の本尊、一寸八分の聖真子権現の一体を笈に納め、それを背負い都を目指して旅立った。

その翌年、業を積んだ林照坊が帰国する時の出来事。越後路から大里峠を準えて羽前の小国（南小国）へさしかかった。日が暮れかけていたので谷深い集落に宿を求めた。その夜は激しい雨が降り、翌朝宿を出る時には雨はやんでいたが村はずれまでくると川があり、昨夜の洪水のために橋が流されていた。木は幾分引いていたので浅いところをねらい杖に頼りながら渡ったが、

近くまで来た時、石に滑り杖の先についている宝珠を川の中へ落してしまった。その後峠にかかると、にわかに腹が痛んできた。我慢しながらもようやく人里まで下り宿を頼んだ。（その家は遠藤といって、いろいろ親切に介抱してくれた。）しかし病はいよいよ重く悪化をたどるばかり、林照坊は臨終の近づいたことを悟り、遠藤に自分の身の上を語り、自分の死んだ後は、笈の中の犬の宮子易権現を高安村に届けてくれるようにとだけ頼み、昨日川の中に宝珠を失ったことを話し間もなくこの世を後にした。

林照坊が宝珠を失った川をその後「珠寶川」とも「玉川」とも呼ばれていたが、玉川のほうが言いやすいので、後世まで玉川の名が残ったとされている。林照坊が死んでから間もなく遠藤の妻が産気づき、7日ほど痛み産むことができなく苦しんでいた。しかし林照坊との約束を果たすため遠藤はそれから早速、笈仏を高安村に送り届けようと出かけた。山を越えて4里ばかりきて、ある家の軒下に笈を置いて休んでいると、その家の中から人の泣く声が聞えてくる。その訳をたずねると、この家の19歳になる一人娘が産気づき、7日も痛み続けていたが、ことのほか難産なので心身ともに疲れ果ててしまい、本人は死を待つばかりなのであるという。遠藤はこれを聞いて家に入り主人に仏の由来を話した。すると主人はとても喜び、身を清めて遠藤と共にこの仏に祈った。すると半時もたたないうちに安産し母子共に健康であった。さらに生まれてきた子はたまごのような白子であり、その後ここを白子沢というようになったと伝えられている。

人々は、このような奇特の笈仏を他国に譲るのはまことに惜しいと考え、永くこの山内に留めて、末世までも小国の守神にするようにと遠藤に勧めた。遠藤もそれに同意して、そこから仏を持ち帰り、自分の屋敷の内に祀った。ここの宮に懷妊を祈る者は皆安産するので、その仏の力は近郷、他国までも伝わっていった。と云われている。

産小屋の話（大宮）

大宮子易両神社に鎮座している大宮の土地は昔から聖地とされており、不浄なことは一切嫌われていた。それ故に出産の時も、隣の集落（増岡）の土地に建ててある産小屋（俗に小屋という）で行なわれている。昔は、ここの産小屋さえ不浄なものとして、常に建てて置くことが許されなかった。産のある度に村中の者が集って一定の場所に囲った粗末な小屋を建てて、産婦が帰るとすぐ取り壊していたが、時の小国警察分署長から従来の産小屋があまりにも不衛生なので常備のものを建てて置く様にとという注意によって設けられたのが後の産小屋である。（6畳1間だけであった。）産婦は分娩してからここに2週間過して帰ることになっていたが、子易神社の守護によって難産したり、小屋にいる間に育児が死亡したりすることは、昔から一度もないそうである。ここの産小屋の汚れた火で調理したものは、産婦以外の者は飲食することは禁じられ、少しでも産小屋に入った者は、必ず塩で身を清めてから家に入るそうである。



小国町教育委員会の研修室にて聞き取り取材の一コマ

お使いの蛇の話（大宮）

大宮子易神社のお使いは蛇であり、その蛇は普通の蛇よりも尾が短く時々境内に姿を見せることがある。蚕が鼠に荒らされるとき、お使いの蛇を借りて守ってもらうことがある。お使いの蛇を借りるには、家を出たら途中一切人と話をしないで神社に行き、お使いを借りたい旨を心の中で申し上げ、手拭いで目隠しをし前に風呂敷を広げ、その中に入ってもらう様をお願いして静かにたたむ。それから日よけをつくり途中口をきかないで家に帰る。蚕室に入ったならば、また目隠しをして風呂敷をひろげ蚕のお守をお願いする。お使いの蛇を借りてきた期間は蚕棚の前に毎朝 ご飯を供えなければならない。そうすることで不思議に鼠が来なくなるそうである。蚕があがったならば、借りてきた時と同様にお返し、お礼を申し上げなければならないそうである。

朝 日連峰の麓に位置する北部地区。山岳信仰という点で調べてみると次のような話がありました。

天狗の角力取場の話（五味沢）

正月の10日、この日は庄内の天狗、最上の天狗、米沢の天狗が、力くらべをする日とされている。前日から集まった大小無類の天狗どもによって、10万8千俵の餅がつきあげられ、（108煩惱の数が関係と云われる）暗いうちから龍が岳で鳴らす太鼓が鳴りひびく。

あたりの山々は一面雪に覆われているがここだけはきれいに掃き浄められ、純白な砂があたり一面にまき散らされている。そしてこれから一年を支配する大天狗を選ぶ日がやってくる。定刻の12時になると正面の一段高い所に、遠く鞍馬山から飛んできた天狗が行司として羽根のうちわを持ち控える。四本柱には南部の恐山、伯耆の大山、信州の浅間山、それから筑波山から馳せ参じた天狗達が座を占める。

庄内、最上、米沢の三方の道からこの日の代表に選ばれたおのおの天狗が修々とあらわれ、凍るような月の下で角力とりをして一番勝ったものが一年間大天狗として君臨できるのである。たまたま、いたずら者が四本の柱の代りにつまれた石を散らかしておいても一夜のうちに元あったようにきちんと積み直されており角力取場はきれいに掃除されているそうです。さらに角力を取る時は必ず土俵の砂上に天狗の羽根あとが波状に付いて、夏になっても消えないそうです。

月夜の晩などに出谷川、見附川などの溪谷から集まってきた小天狗たちが砂原の土俵で遊ぶとされるこの場所は、現在は盤梯朝日国立公園になっています。今でも時々あたり一面に彼らの羽根あとが目撃されているそうです。（谷風の吹上げと峰を越えてくる風との衝突がもたらす作用と考えられています。）

担当の先生は以前山岳部顧問をしておられ話を伺うと、西村山郡大# 沢中村から大# 沢川に沿って、龍ヶ岳に登り、天狗小屋、二ツ石山を越えて朝日連峰の横復にさしかかる大# 沢口の途中に「天狗の角力取場」という地名があり、この場所は大# 沢中村から徒歩約4時間かかり、天狗小屋のすぐそばに位置し、朝日連峰では数ある有名な展望台の1つだそうです。緑一面のハイマツに周囲をかこまれ、花崗岩のきれいな風化砂礫が敷きつめられ、まるで、本当にほうきで土俵の砂をはき浄めたかのようなようであるそうです。この光景を見ると「山土の土俵」と話が残る理由もわかるとおっしゃっていました。私たちも実際にその景色を眺めてみたいと感じました。

更に昔物語を調べていく中で、次のような話がありました。

三面の耳さがりの話（入折戸・折戸）

昔、三面（みおもて）集落の近くに大変恐ろしい山賊が住んでおりました。時々山々のさびしい所に現われては身ぐるみをはぎ取っては逃げ隠れし住んでいました。ひどい時には三面の集落に現われ三面集落の人々を大変困らせていました。集落の人々がいくら抵抗してみたところで相手は恐ろしい山賊。とうていかなう相手ではありません。集落の人達は、どうすることもなく泣き寝入りの生活を送っておりました。

そんなある日、折戸集落に住んでいる小池之助という武士がこの話を耳にしました。小池之助は今でこそこんな山の中に隠れ住んでいるが、平忠盛から血の流れを引く立派な平家の武士でした。「よし、俺がその悪い山賊を退治してくれよう。」と小池之助は先祖から伝わる大事な刀を持って山賊の住み家に向いました。小池之助は山を探し歩いて、ついに山賊の住み家を見つけることができました。小池之助は山賊の家の前に立ち「こら、善良なる村人をいじめる悪い山賊。平家の血の流れをくむ小池之助が天に代わっておまえ達を退治にきた。」と大声でどなりつけました山賊たちは、この突然の出来事と1人で山賊の住家に向かって来たこの男に驚きました。「なにを。この若者、おれ達を誰と思っている。1人で退治できると思うなら俺達を退治してみろ。」と槍や刀などの武器を取り小池之助に向ってきました。しかしいくら強い山賊といえど、小池之助は立派な強い武士、かなう訳はありません。小池之助は山賊を全部切り倒しました。そして山賊を退治した証拠にと山賊の耳を切り落とし近くの木にぶらさげてきました。小池之助は集落に帰ってきて「村の衆安心せい。山賊は俺が1人残らず退治してきた。」と山賊退治の一部始終を伝えました。

しかし、集落の人は「あの恐ろしい山賊をまさか？1人で退治できる訳がない。」と誰一人として本気で聞いてくれる人はいませんでした。そこで小池之助は、嘘だと思ふなら山賊の住家に行ってみろ。俺は山賊を退治した証拠に山賊の耳を切り落とし木にぶらさげてきた。」と言いました。集落の人々はまさかと思いながらも小池之助の言う住処に行ってみると、彼の言う通り本当に耳がぶらさがっていたそうです。

それ以後、その場所をみんなが「耳さがり」と呼ぶようになったと云われています。小池之助はそれ以後集落の人々から尊敬されるようになりました。そして三面集落の人々からは集落を救ってくれた人という事から集落、三面の長として迎え入れられました。そして小池之助は一生そこで暮らしたということです。そしてこの小池之助は現在三面集落の小池家の先祖であるとも云われている。

三面集落（新潟県）の山賊の話が出てきました。そこで山賊のいるような深い山を越えての交流があったのではないかと考えてみました。そこで峠道を調べてみたところ。今は廃れてしまったそうですが北部地区からは「村上へ通ずるルート」「長井へ通ずるルート」という2つの峠ルートがあることがわかりました。そしてその街道はそれぞれ「柳生戸街道（村上ルート）」「西山街道（長井ルート）」と呼ばれ、特に柳生戸街道は、俗に【塩の道】と呼ばれていることもわかりました。

小国には主要道であった越後街道（13峠）というものがあります。（昨年のレポートで現地調査をした道もその一つ）その支道の役割があったのか？昔の村上城から見ても小国町北部地区は方角では東側にあたり、米沢に渡る場合、現在のルート（国道113号線）よりも直線上に位置し距離的にも短縮され都合がいいように思えます。この街道はどのように開拓され、そして衰退してしまったのかを次に詳しく調べてみようと考えました。

(3) 北部の街道

1 柳生戸街道（やなぎよど）

今年学校のPTA会長をなされている高橋義彦さんが北部地区にお住まいということで北部の歴史に詳しい安部文雄さんをご紹介していただきました。安部さんは昔から北部の長沢にお住まいで、家の土から見つかった刀を始め歴史的遺産を所有されている方でした。お話を伺う際に当日は安部さんのお知り合いである、小国の歴史を調べられている増田剛雄さんにも参加していただき塩の道について北部地区のコミュニティセンターで詳しくお話を伺いました。



北部地区の歴史の聞き取り風景



安部文雄さん宅に代々伝わる古文書を見せていただきました。
関所を越えるに必要であった、江戸時代の寺手形（左）とその訳（中）
そこには北部地区の寺の住職をされていた方の名前が記載されていました。



なお古文書の表紙には紙の補強や虫除けという目的から、ウルシが塗られていました。
北部の五味沢地区はウルシが多く取れ会津塗（福島県）と時期を同じくしてウルシを施した木地づくりが盛んであったことをお聞きしました。一時期、途絶えてしまったのですが、地元の方のはたらきかけで、地区には「※白い森 工館」と呼ばれる木工体験ができる施設ができました。

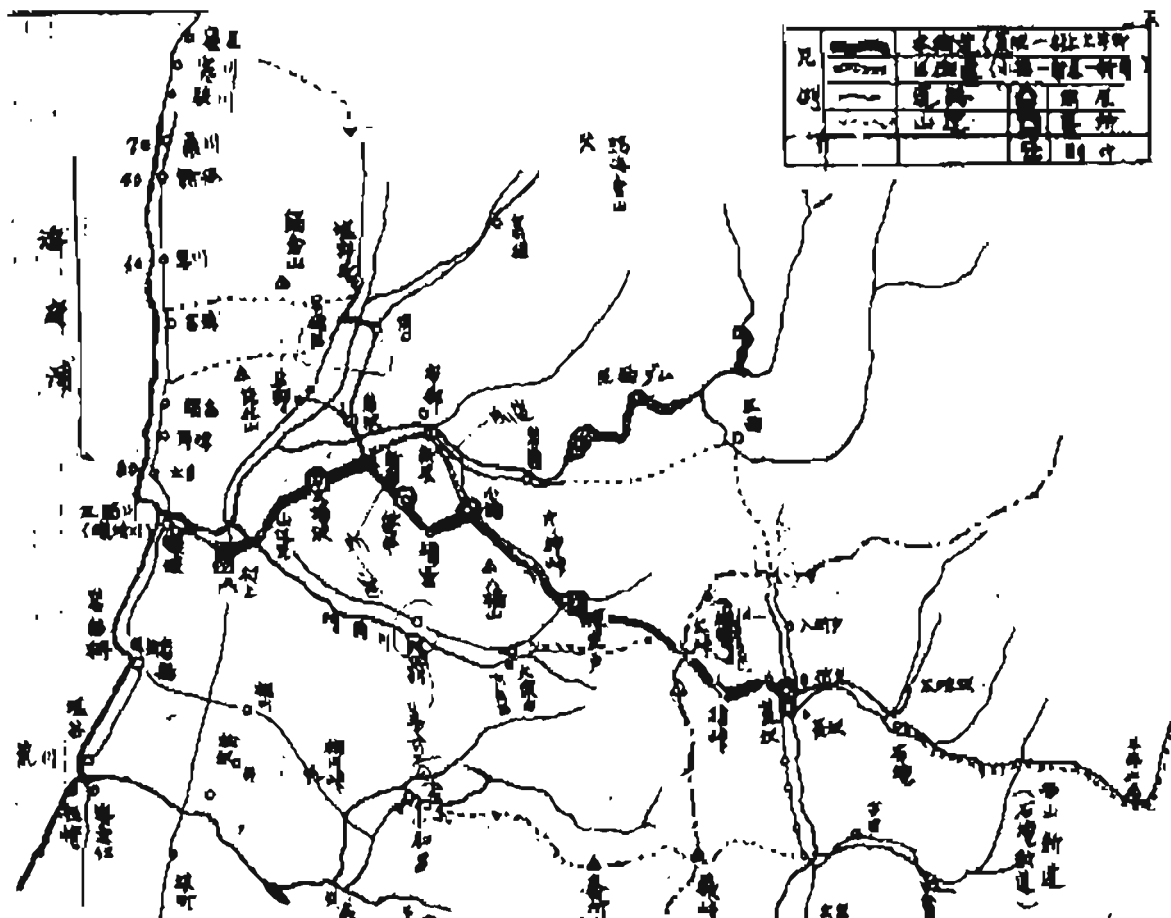
※白い森・・・【小国町の木、ぶなの白い木肌】【冬の白い雪】からイメージして付けられた愛称。小国町では「白い森〇〇〇」という施設が多く存在します。



柳生戸街道（新潟県村上－笹平－小揚－柳生戸－大峠－相平－小国町荒沢）

柳生戸街道は俗に「塩の道」と呼ばれていました。「塩の道」とは新潟県村上から塩や海産物、山形県小国側からは米沢藩から引き継いだ煙草などの交流があったことからこの名がつけられたといわれています

六ヶ字地区塩の道保存協議会資料より



県境に位置し戦前には往来が途絶えたこの柳生戸街道を調べるために、平成2年に小国町・朝日村の方々が集まって「いにしへの道・柳生戸保存協議会」を設立、町内の渡部徳太郎教育長を講師に招き「塩の道サミット」と称し村人が集まり勉強会も開催し、調査団（小国町側踏査団）も結成し調査を行い、その後は定期的に修復活動を行っているそうです。

柳生戸街道付近の絵図



番所	慶安3年（西暦1650年）には 玉川・上荒沢など12か所あった
助け（救助小屋・避難小屋）	相平と呼ばれる場所に設けられ 季節的に主に冬に利用された。スノー小屋
問屋	江戸時代、宿場で人馬の継立をした事務所 牛宿・旅人宿を兼ねるものも多かった。
大嶮	標高659メートル「お境」と呼ばれていた （国境ではなく・地形的見地から）
道陸神（どうろくじん）・道祖神	交通不便な時代、旅人の安全を守る神。 村端・分かれ道・橋などに祀られる。

いつ造られたかは定かではありませんが、江戸時代荷役を行った場所として荒沢の地名があることから

「荷改ヲ行ツタ番所ハ十二ヶ所デ玉川ト荒沢ノ名ガミエル。」（慶安３年 上杉 綱勝の時）

３６０年ほど前には交通の要所で村上藩と米沢藩の物資を結ぶ交易ルートではなかったかと推測されています。

峠道はまったくの山道で険しい場所では「１７曲がり」と呼ぶ坂があります。人が通るだけなら曲がりはいくらでも必要はありませんが馬を連れて歩く為（馬だけでなく牛も通っていた記録がある）に多く設けられ傾斜を緩くしているということでした。標準的な荷の持ち方は背中に一俵、両脇に一俵ずつの計３俵分の荷を持ち、峠を行き来していたそうです。樋ノ峠と呼ばれる山には道陸神（どうろくじん）が祀られており、山に入る際そこに１本の木の葉を置き、帰りにそれを回収する。現在何人が峠を通っているのか？無事下山したのか？などがわかる仕組みになっていて、いわば現代版、登山者名簿的な役割も果たしていたそうです。その他途中には馬や牛がのどを潤すための水をためていた直径５～６メートルほどの穴があったそうです。

新潟県との交流があった名残として今も益田・原田・斉藤家の一族が残っているといわれ、問屋という屋号のもつ家は、そこで品物を取り次いだ事にちなんで名付けられたそうです。さらに当時の村の仏壇のほとんどは村上で作られたもので、街道を人の背に乗って運ばれてきたといわれています。



現在の塩の道街道小国側登り口。行く途中には「熊出没注意」の看板を多く目にしました。

廃道となった原因は「米坂線」が今の場所に引かれたことが影響していると考えの方が多く（塩の道ルートに旧国鉄（現ＪＲ新潟坂町駅～山形米沢駅線）を通す計画もあった）開通後、目に見える形で人の交流を含む物の流れが大きく変わったそうです。「道路も沿線に発達し塩の道はその役割を終えてしまった。」とお聞きして少し悲しい気持ちになりました。もし鉄道がここを通っていたなら、それに沿って車道ができ、民家や商店が増え、人の動線が変わり、現在より良くなっているのか、悪くなっているのかは想像が付きませんが、今の小国町は大きく変わりずいぶん違ったものになっていた事でしょう。クレオパトラの鼻の高さの話の様に町づくりの基盤となる土地の整備というものは、次世代に渡り住人の生活に大きな影響を及ぼすという事実。土地改良という公共事業を進めるには発展・町おこしなどのメリットと、その管理・維持、そして今は地球への負担も考慮し将来を見据えた考え方が必要だと強く感じました。

柳生戸で運んだとされている物資

米沢方面へ運ばれる荷を「上り荷」、越後方面へ運ばれる荷を「下り荷」と呼んだ。

- ・上り荷は 塩、鉄、肴（魚）類、茶などの海産物。
- ・下り荷は 青苧、たばこ、ローソク、灰荷 などであった。

塩	・ 日常的な必需品である塩は当時作るのが非常に難しいものであった。 ・ 製塩の際、火を燃すに使用する大量の木材は、山から刈り、川を堰き止め、水量を増させた川に流し瀬波の方へ運んだ。 ・ 海府浦の製塩法は独特で釣釜式と呼ばれるものであった。 ・ 慶応 2 年の塩の税金（瀬波郡絵巻）より <table><tr><td>製塩所</td><td>桑 川</td><td>新 保</td><td>早 川</td><td>大 月</td></tr><tr><td>税 金</td><td>7 0 俵</td><td>3 0 俵</td><td>6 0 俵</td><td>2 0 俵</td></tr></table>	製塩所	桑 川	新 保	早 川	大 月	税 金	7 0 俵	3 0 俵	6 0 俵	2 0 俵
製塩所	桑 川	新 保	早 川	大 月							
税 金	7 0 俵	3 0 俵	6 0 俵	2 0 俵							
鉄 （御用鉄）	・ 大部分は越後街道（ 1 3 峠）を輸送した（天保 5 年の文書）がこれ以前は柳生戸街道（大峠）も利用された。 ・ 鉄は、米沢藩では専売制で、他の諸藩と同様、自由販売は認められなかった。「御用荷物」として厳重に取り扱われた。米沢城下と小国に藩の鍛冶屋が置かれ、農具や刃物が作られた。										
魚 （秋味）	・ 乾魚・塩魚に加工し村上 からの他出の 8 割を米沢領 へ輸入、幕末の米沢藩の台所を潤したとされている。										
茶 （村上 茶）	・ 村上 茶は茶の北限といわれていた。 ・ 起源 村上 上 町徳光屋土田寛左エ門 元和元年（西暦 1 6 2 0 年）伊 勢参宮に行き宇治の茶の木を見て種子を持ち帰ったといわれている。 ・ （宝永元年（西暦 1 7 0 4 年）9 月 2 2 日の書付）より米沢領 内へ輸入。										

青苧 （苧麻・からむし）	・ 庶民の衣料の原料として古くから栽培される。 ・ 下長井 地方 特に白鷹地区（箕和田・萩野・十王・畔藤）が盛んであった。
たばこ	・ 米沢にたばこが伝わったのは慶長 1 5 年（西暦 1 6 0 5 年）とされる。 ・ 当初は医療効果があるとされた。 ・ 鷹山公の国産奨励（米沢里人談）
灰荷	・ 織物の染料の際、使用する。 ・ 新潟は山辺里織（さべりおり）山北科布（さんぼくしなぬの）五泉平（ごせんひら）など織物が有名で良質な水 と生糸となる繭の生産に恵まれている。

数年に1度峠の下刈りが行われ、今年は実施年であることをお聞きし、7月下旬に行われる下刈り日にあわせ私たちも参加させていただこうと準備をしていましたが、今年は例年以上に熊の被害が多く、多数目撃もされていることから私達には危険と判断し断念しました。残念でしたが機会を見つけ、いつかみんなで歩こうと話し合いました。塩の道からはルートが外れるのですが三面にはダムがあり、そこまでは未舗装ながらも小国側から車で行くことができるとの事でした。

2 西山街道（西山新道・また小国では石滝新道と呼ぶ場合がある）

小国から朝日連峰を挟んだ東側に位置する長井市があります。そこはかつて最上川の舟運で栄えた町でありました。

慶応2年（西暦1866年）この年、幕末の世情不安に追い討ちをかけるような凶作であり、物価が高騰していました。

「諸品ますます昇り、新米一俵19貫5百文ぐらい。中折（なかおり）1帖450文。品物によっては4倍より10倍ぐらい。値段を聞いてためいきをつき、目玉をきらめかし、ただそっとしばらく立ち見るばかりなり。」
「歳々風雨物直咄集」より

そんな中、酒田（庄内）から左沢（あてらざわ）まで最上川の航行権を握る酒田の商人達は、足元を見るかのように船賃の値上げを要求しました。

増銭として100両相当の品に4両2分（4.5%）の手数料 「長井市史」より

それに対し、長井の商人は怒り心頭、別ルートを模索したとされています。

物資を越後の瀬波港へ降ろして、そこから陸路で長井（小出）に輸送する。そして将来は山形や仙台方面への貨物輸送の中継ぎ基地にしようという案を出しました。「小国まで行けば瀬波まで柳生戸街道（塩の道）があり、長井（小出）からは明神平（野川の奥）までも道はある。あとは明神平から小国（石滝）までの道を開拓すればよい。」と、長井の商人たちは自費で切り拓きました。

手続きに藩の許可（幕府の承認）を得る際、当時の幕府としては幕府の危急存亡が目の前の問題であったためか、幕府は「好きな所へ、好きなように作れという異例の返答であった。」とされています。（ただ投げやりではなく、藩からも協力は得ていたようです。）

ただ、会談所（六老の詰所）・御金蔵（一藩の現金の出納及び管理にあたる）・御役所（役所役と称し奉公の下にあって藩全体の庶政を司る）に対し、三ヶ村（下長井・小出・成田）より願い出た開鑿という大業に対して各所協力して時折出勤して、万端手落ちなく。と指示し小国役屋にある蔵米の払米100俵のうち、97表（米代と駄賃分を合わせ1851貫35文に相当）を新開人足の夫食分として与え、さらに10月には出勤役人の賄料418貫290文と御手当銭250貫文を金蔵より小出村の元方に支払う。

「長井市史」より

米沢藩にとっても、経済的・軍事的な重要性があったということでしょうか。

- ・工事は慶応3年（1867年）（雪解け後の4月着工）5月～8月
- ・総工費31454貫文余りそれでもなお254貫文余の現金が残った
- ・工事人夫（土工）述べ15200人 村方人夫（百姓）約4000人

助け小屋の解体中に下敷きになり亡くなったものもいた。その時香典として金三両が送

られたとの記録がありました。（時価にして米一俵とされています。）

「新道御普請 諸入料、金銭受払総目録」より

また、この時、山形城下きっての豪商で山形藩の御用達商人をも兼ねる長谷川吉郎次が新道開削に元手を出すという話もあったが、他国より元手を受け取っては、将来に必ず禍根を残すということで、これを断った。と記している。 「歳々風雨物直咄集」より

新道は小出を起点として全行程約64キロそのうち、改修すべき区間は「入野川ー明神平ー折草ー蛙沼ー姥獄ー三体の腰（三体山）ー二本木ー三体裏ー丸山ー篠平ー金目川ー石滝山ー石滝川石滝元村ー五味沢ー荒沢」でおおよそ24キロにも及んだ。

入野川から明神平までは山道の手直し・石滝村から荒沢までは従来の道の曲がり直し、幅を広げる。一部改修工事のような箇所もあった為「古道相開」と記されているものもある

初めに開削工事の基地となる夫陣小屋や新開小屋が、折草・姥獄・篠平・金目川・石滝村の5か所に作られ、最上方面からは新開頭として6人が迎えられた。

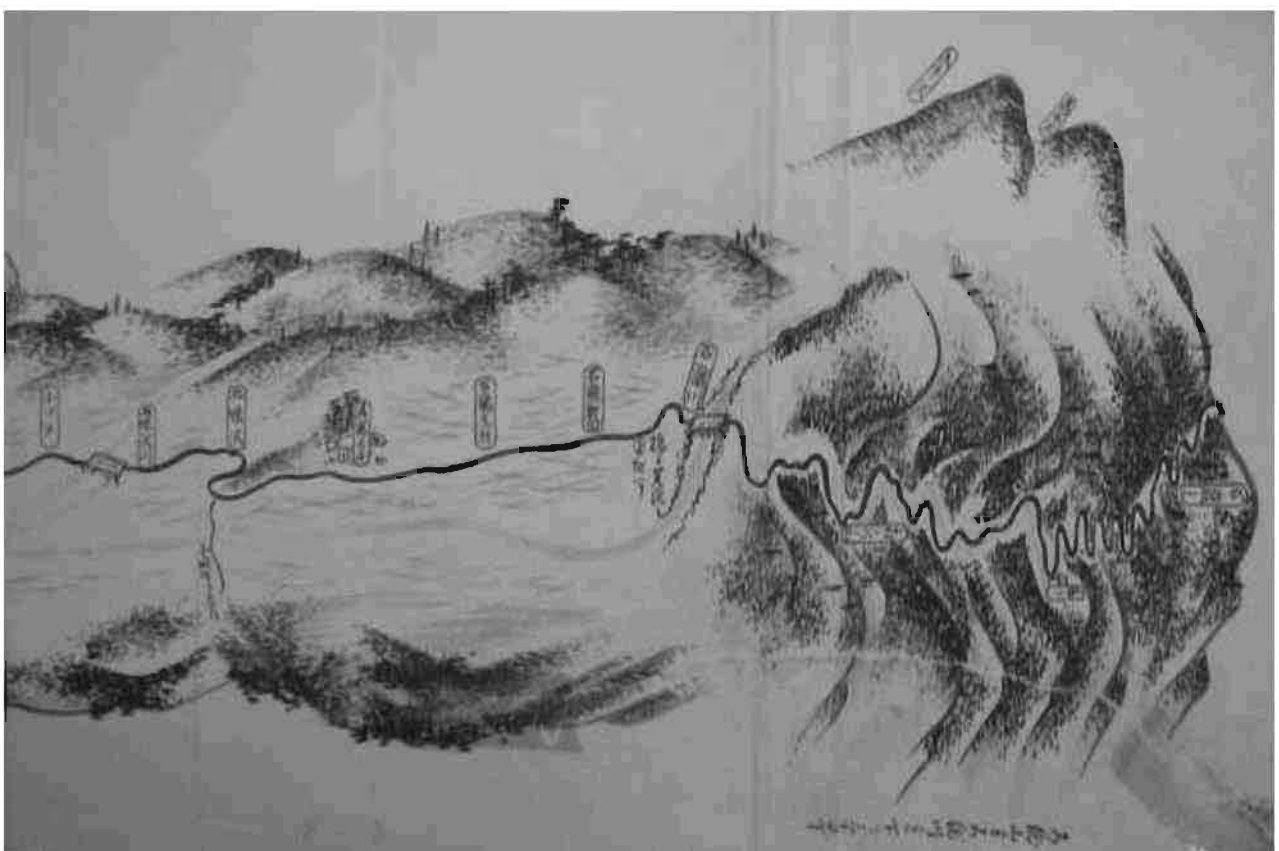
工事の人足は下長井と小国方面から、すべて有償で集められ、従事した作業の難易によって日料の代金が与えられた。

また要所に荷物をつけた牛の交換ができるように「牛除場（うしよけば）」（待避所）を55か所、橋は新たに8か所架けられ、「助け（救急小屋）」も3か所（二本木・金目川・石滝山）設置され、無事新道は開通した。

下長井 川柳の第三世を継いだ縁庵加藤雅外が書いた「西山新道細見」が次の絵図です

（武田清五郎氏（小出）・佐々木 嘉兵衛氏（成田）蔵）より

西山街道の鳥瞰絵図1（石滝山（右）～五味沢（左）までの道のり）次頁との続き絵を2分割



西山街道の鳥瞰絵図 2 (五味沢 (右) ~ 荒沢 (左) までの道のり)



西山街道の鳥瞰絵図 3 (長井 側から小国側を望む 三体山 (上) ~ 入野川 (下) の道のり)





「新道は宮・小出から平山村に至り、入野川から急坂を明神平（この間1里）に登り、ここで中村あるいは大平からの道に合し、明神平から下り坂を折草におち、再び登り坂を蛙沼の脇を通して、三体山の裏側にある二本木（明神平・蛙沼 間1里、蛙沼・二本木 間16丁）に出て二本木から丸森・丸山・篠平・中平・逢平を下って金目川の橋（二本木・金目川橋 間2里半3丁）に金目川の橋からの登り道を行き金目山を越えて石滝山（金目川橋・石滝山間22丁）に出て、下り道を石滝川の橋（石滝山・石滝川橋 間34丁）に至り、ここから平地で石滝・五味沢・五味沢川橋・太鼓沢・焼山を通り荒沢の関所（石滝川橋・荒沢間2里）に着く。荒沢からは樋の峠を越え柳生戸を通り村上まで9里の道のり」と記録されています。

しかし完成から2ヵ月後の慶応3年10月、時の将軍徳川慶喜は大政を朝廷に奉還し、徳川幕府は終わりを告げる。

年を越した明治元年（西暦1868年）戊辰（つちのえたつ）の年、薩摩・長州を中心とする官軍は正月3日の鳥羽・伏見の戦い旧幕軍の討伐に乗り出し、ついに戊辰戦争となり東日本全体を巻き込んでいきました。4月に江戸城を無血開城、5月に幕府方の残党を上野の山で壊滅させた官軍は、新政府の威信をかけ、奥羽列藩同盟を結び、異を唱える新潟を含む東北諸藩に差し向いました。もはや賊軍となった東北諸藩に力はありません。

そんな時、村 upper 方面に進出していた米沢藩の敗走の報とともに、ある噂が流れた。「官軍の総大将、西郷隆盛が、西山新道から攻めてくる。」人々は慌てて行く手を遮るため、土手を築き、西山街道に架かる橋を落とし、大木を切り、道をふさぎ官軍の来襲に備えました。

明治元年8月28日、米沢藩は降伏した。結局官軍は西山新道を通らず、越後街道（十三峠）を通して米沢に入ったそうである。

米沢藩は奥羽越列藩同盟を形成する雄藩として、北越に軍兵を派遣して官軍と対峙したが戦いに利なく大敗し退却せざるを得なかった。8月11日官軍は村 upper や関方面に進出し、その先鋒は沼の手前にある榎木峠まで迫っていた。翌日12日には榎木峠において両軍の間に合戦が行われたが、米沢藩はここでも敗れ、さらに後退し国境の大里峠に最後の守備陣地を構築した。

更に「歳々風雨物直咄集」の著者である新野伊三太氏はこの時、金目川の番兵を勤めていた。このことを次のように記録しています。

22日には、総督千坂高雅が金目川に宿して、金目川の番兵に酒4升を与え、新道通りを巡回して諸陣地の番兵を激励。また25日には世子茂憲が小国玉川から金目川に廻ってきて、新道の番兵を励ましている。世子一行はその日、平山村の天神寺に宿泊する予定であったが米沢からの早駕籠に接し、急ぎ明神平から大平を通して萩生村（現飯豊町）に下り、夜通しで米沢に向かった。

これは官軍からの降伏勧告書が米沢藩の手に渡されたことによるものではないかと推測されています。

明治に入ってから宇津峠の開削を始めとする新越後街道の開通により西山街道は存在価値がなくなり、実用に供することもなく、雑草の生い茂る山野に戻りました。それでも明治から大正にかけてはかろうじて道形をたどり新道を石滝方面に向かうこともできたそうですが、大正の末頃からは通る人もいないまま荒廃していったそうです。

この西山街道がもし明治の時代に十分利用されて縦貫道路としての面目を保つことができたのなら、小国だけではなく長井の町並みも変わっていたかもしれません。

(4) 物資の輸送

1 陸の輸送

当時の物資もしくは人を輸送する陸の経路と川の経路を探ってみました。

長井の商人は左沢周りの舟運を主に利用していた。その他に積荷を新潟・村上で陸揚げし小国経由（越後街道）で運ぶ方法もとられていたが、この道は牛馬駄送の上では、道幅が狭く、数多くの峠（十三峠と呼ばれるゆえん）などの難所が続き、大量の荷物を運送するとき際は不便で輸送費も決して安くなかったといえます。当時の輸送費はいくらだったのか調べてみました。

運べる量		
伝馬（てんま）	40貫目	幕府領主の公用。無賃。
本馬（ほんま）	36貫目 ～40貫	公用及び諸大名が、定賃銀で使用する馬。 主として荷を付けて運ぶ馬。
軽尻 （からじり）		人が乗って荷を付けないもの。5貫目までの荷は許された。 人を乗せないときは、本馬の半分20貫目までの荷。
乗懸 （のりかけ）		人が乗って荷物を付けたもの。 荷物は20貫目まで。賃金は本馬に同じ。
人足（背負子）		人が背負い運ぶ。荷物は5貫目（約19kg）まで。超えれば目方に応じて払う。
慶長6年（西暦1601年）の定書より、伝馬荷物は1駄30貫目、駄賃荷物は1駄40貫目。 寛永2年（西暦1625年）には伝馬も駄賃馬も1駄40貫文と定め、長く駄送の基準となる。		
※ 当時、荷を運ぶ馬を【駄馬】といい、運賃を取って輸送する駄馬を【駄賃馬】と呼び、それを職業とする人を【駄賃馬稼】と呼びました。また、【伝馬】とは幕府領主の公用をこなすために宿駅で馬を乗り継ぐ馬のことを指しました。		
※ 通貨と質量の単位に当時「貫」を使用し、その際、単位を区別にするために質量単位は【貫目】・通貨単位は【貫文】としていた。（明治時代に1貫目は3,75kgと定義）		

以下は越後・米沢間輸送の際、当時主要道であった越後街道（十三峠）の記録です。

宿と宿の間の賃金は、それぞれ定められていました。

延享3年の覚書（井上清右衛門）より

区 間		米沢 ～ 上小松	～松原	～ 手ノ子	～沼沢	手ノ子 ～ 白子沢	沼沢 ～ 市野々	白子沢 ～ 市野々	～小国	～玉川
距 離		3里 12丁	1里 19丁	30丁	2里 20丁	3里	1里 30丁	1里 14丁	2里 23丁	2里 6丁
駄賃 (文)	本馬	138	68	32	175	193	133	115	155	164
	軽尻	92	45	22	116	129	89	75	103	110
	人足	69	34	11	59	65	44	38	52	55
※ 駄馬輸送の困難な冬季は、背負子（しょいこ）による以外なかったとされています。										

米沢から小国まで本馬で40貫目（150kg）の荷物を運ぶとすると（網掛け部の和）701文となる。文政年間（1818～1829）の記録で1文が約12円。8、412円 となる。

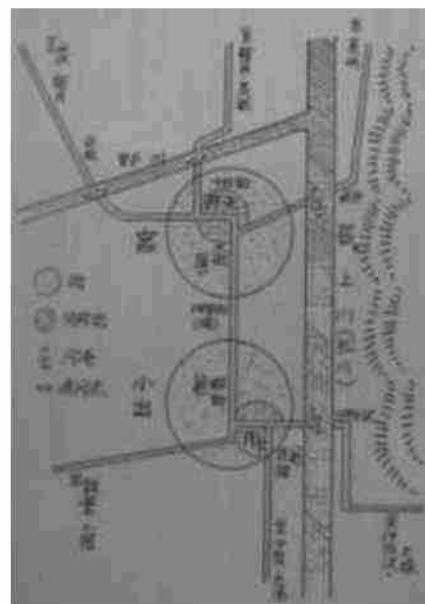
2 川の輸送（舟運）



最上川上流の舟運（左図）は、元禄年間の舟路開削で発達しました。左沢（あてらざわ）もその一つで、そこには米沢舟屋敷（陣屋）をおきました。米沢藩の領内である最上川（当時は松川と呼ばれました）にも同じように陣屋・宮陣屋を設けました。糠野目（現高島町）には陣屋はありませんが、米沢盆地内で川船が発着できるようにと整備はされました。なぜならそこは山形・上山方面に通じる米沢街道と交る場所で、米沢から松川舟運を利用するには最も近い所。という理由からです。しかし、水量の豊富な時期は限られていたため荷物の揚げおろしだけで川岸場商人の発達はほとんど見られなかったといわれています。

一方、松川の川岸として最も栄えたのは長井の宮・小出の舟場でありました（右図）。ここを流れる松川は、飯豊山から流れる白川と朝日山系の野川が合流し当時から水量も豊かだった事が影響し宮・小出は物理的にも経済的にも長井盆地の中心となったため、早くから長井を中心に6本の主要道が造られました。そこを起点として放射状に出ているその交通体系は現在も変わっておらずバス路線もこれによって編成されています。

- ・長井（最上川渡河）東山麓經由 荒砥
- ・長井（野川渡河）成田 鮎貝（最上川渡河）荒砥
- ・長井（野川渡河）勸進代 鮎貝
- ・長井（最上川渡河）伊佐沢（最上川渡河）大塚
- ・長井（白川渡河）今泉（最上川渡河）赤湯
- ・長井 平野 飯豊 小国



当時たいいの物資は、荒砥舟場で積み荷を降ろし、翌日宮舟場で酒田からの送荷や、荒砥方面からの委託品を積んで帰村したといわれています。その後明治以降は道路の改修・新設、荷車の出現で明治20年代に高島・南陽方面からわずかの建築用石材運搬が主となり荷船は姿を消していきました。

明治12年の舟運の賃銭

（山形県史）より

渡しの名	川の名	区間	用幅	渡銭（人・馬）
荒砥	松川	石那～鮎貝	40間	6銭・8銭
小出下	松川	小出～森	35間	5銭・7銭
小出上	松川	小出～伊佐領	45間	5銭・7銭

調べていくにつれ、当然のことなのですが、今と変わらず昔もサービスに応じての対価が変動し、その中で身分相応の生活をしていたということが実感でき、そこで商売する商人と客との値切りなどの掛け合いもあったのかもしれないと考えると想像が膨らみ、とても楽しいものでした。

天明後の米一俵の価格表

「米に換算すると、」という表記が頻繁に出てきます。感覚を掴むために時代の価格を表にまとめてみました。新野伊三太「物資咄集」を参考に、明治以降のレートと記事を追加しました。

天明元年		金 1 7 銭	1 3 年		金 2 0 銭
2 年		金 1 6 銭	1 4 年		金 1 8 銭
3 年	天明の大飢饉	金 2 2 銭	文政元年		金 1 6 銭
4 年		金 2 0 銭	2 年		金 1 3 銭
5 年		金 1 8 銭	3 年		金 1 2 銭
6 年	大雨洪水	金 2 2 銭	4 年		金 1 3 銭
7 年		金 1 7 銭	5 年		金 1 4 銭
8 年		金 1 6 銭	6 年		金 2 1 銭
寛政元年		金 1 5 銭	7 年		金 2 6 銭
2 年		金 1 2 銭	8 年		金 1 8 銭
3 年		金 1 5 銭	9 年		金 1 6 銭
4 年		金 1 5 銭	1 0 年		金 1 9 銭
5 年		金 1 5 銭	1 1 年	越後地震	金 3 6 銭
6 年		金 1 6 銭	1 2 年	江戸大火	金 3 9 銭
7 年		金 1 8 銭	天保元年		金 3 0 銭
8 年		金 1 7 銭	2 年	総人口 2 7 2 0 万	金 3 0 銭
9 年		金 1 5 銭	3 年	全国飢饉始まる	金 3 8 銭
1 0 年		金 1 5 銭	4 年	天保の大飢饉	金 2 5 銭
1 1 年		金 1 5 銭	5 年		金 3 0 銭
1 2 年		金 2 6 銭	6 年		金 3 7 銭
享和元年		金 1 7 銭	7 年	諸国飢饉	金 6 0 銭
2 年		金 1 6 銭	8 年	大塩平八郎の乱	金 2 8 銭
3 年		金 1 6 銭	9 年	佐渡百姓騒動	金 3 4 銭
文化元年		金 1 2 銭	1 0 年		金 3 6 銭
2 年		金 1 5 銭	1 1 年		金 2 8 銭
3 年		金 1 4 銭	1 2 年		金 3 0 銭
4 年		金 2 1 銭	1 3 年		金 3 5 銭
5 年		金 1 4 銭	1 4 年		金 2 5 銭
6 年		金 2 0 銭	弘化元年		金 2 9 銭
7 年		金 1 0 銭	2 年	米騒動	金 5 0 銭
8 年		金 1 4 銭	3 年		金 3 5 銭
9 年		金 1 4 銭	4 年		金 3 8 銭
1 0 年		金 2 1 銭	嘉永元年		金 3 5 銭
1 1 年		金 1 6 銭	2 年		金 4 7 銭
1 2 年		金 1 6 銭	3 年		金 6 7 銭
4 年		金 4 6 銭	2 2 年	山県内閣	2 円

5 年		金 4 6 銭	2 3 年	教育勅語	2 円
6 年	ペリー来航	金 4 7 銭	2 4 年	松 方内閣	3 円 6 4 銭
安政元年		金 4 0 銭	2 5 年	伊 藤内閣	2 円 2 8 銭
2 年		金 2 8 銭	2 6 年		3 円 6 6 銭
3 年		金 3 2 銭	2 7 年	日清戦争	3 円 6 6 銭
4 年		金 5 1 銭	2 8 年		4 円
5 年		金 5 5 銭	2 9 年	松 方内閣	3 円 7 2 銭
6 年		金 6 7 銭	3 0 年	伊 藤内閣	4 円 1 6 銭
万延元年	桜田門外の変	金 7 9 銭	3 1 年	大隈・山県内閣	3 円 2 8 銭
文久元年		金 6 5 銭	3 2 年		4 円
2 年		金 5 6 銭	3 3 年	伊 藤内閣	3 円 7 6 銭
元治元年		金 7 8 銭	3 4 年	桂内閣	3 円 7 6 銭
慶應元年		1 円 4 2 銭	3 5 年		4 円 9 6 銭
2 年		1 円 9 4 銭	3 6 年		4 円 3 6 銭
3 年	江戸幕府滅亡	1 円 4 6 銭	3 7 年	日露戦争	4 円 3 6 銭
明治元年		1 円 6 9 銭	3 8 年		5 円 2 8 銭
2 年		3 円 4 3 銭	3 9 年	西園寺内閣	5 円 2 8 銭
3 年		1 円 8 7 銭	4 0 年		4 円 7 2 銭
4 年		1 円 1 2 銭	4 1 年	桂内閣	4 円 9 2 銭
5 年	初の鉄道開通	8 0 銭	4 2 年		4 円
6 年	地租改正	1 円 2 0 銭	4 3 年		5 円 3 6 銭
7 年		1 円 8 7 銭	4 4 年	西園寺内閣	6 円 1 6 銭
8 年		2 円 5 銭	大正元年	桂内閣	8 円 3 2 銭
9 年		1 円 1 8 銭	2 年	山本内閣	8 円 3 2 銭
1 0 年	西南の役	1 円 3 4 銭	3 年	大隈内閣	7 円 2 8 銭
1 1 年		1 円 9 2 銭	4 年		4 円 3 7 銭
1 2 年		2 円 6 4 銭	5 年	寺内内閣	5 円 5 2 銭
1 3 年		4 円 8 0 銭	6 年		6 円
1 4 年		3 円 2 8 銭	7 年	原 内閣	8 円 4 8 銭
1 5 年	日本銀行創立	2 円 8 銭	8 年	戦争米騒動	1 0 円 6 0 銭
1 6 年		1 円 2 5 銭	9 年	人口 5 5 0 0 万人	2 0 円
1 7 年		1 円 8 4 銭	1 0 年	高橋内閣	1 4 円 2 0 銭
1 8 年	内閣制度始まる	1 円 7 3 銭	1 1 年	山本内閣	1 0 円 2 0 銭
1 9 年		1 円 5 5 銭	1 2 年	関東大震災	1 0 円 4 0 銭
2 0 年		1 円 4 6 銭	1 3 年	清浦内閣	1 5 円 3 0 銭
2 1 年	町村制施行	1 円 4 2 銭	1 4 年	加藤内閣	1 3 円 6 0 銭

昭和元年	若槻内閣	1 2 円 7 0 銭	3 8 年		5 0 3 0 円
2 年	田中内閣	1 0 円 8 5 銭	3 9 年	新潟地震	5 7 7 5 円
3 年	金融恐慌	1 0 円 6 0 銭	4 0 年		6 3 0 8 円
4 年	浜口内閣	1 0 円 4 0 銭	4 1 年		7 0 2 0 円
5 年		6 円 2 8 銭	4 2 年		7 6 7 7 円
6 年	若槻・犬養内閣	6 円 5 0 銭	4 3 年		8 2 0 8 円
7 年	満州事変	8 円 2 0 銭	4 4 年	自主流通米制度	8 2 1 8 円
8 年	5・15事件	1 0 円 8 0 銭	4 5 年	減反騒動	8 2 1 8 円
9 年	岡田内閣	1 4 円 8 0 銭	4 6 年		8 6 3 1 円
1 0 年		1 0 円 9 0 銭	4 7 年	田中内閣	9 0 3 0 円
1 1 年	広田内閣	1 1 円 8 0 銭	4 8 年		1 0 3 9 0 円
1 2 年	林・近江内閣	1 2 円 9 0 銭	4 9 年		1 3 7 0 2 円
1 3 年		1 3 円 4 2 銭	5 0 年	三木内閣	1 5 6 1 2 円
1 4 年	平沼・阿部内閣	1 6 円 3 5 銭	5 1 年		1 6 6 1 3 円
1 5 年	米内・近衛内閣	1 6 円 3 0 銭	5 2 年	福田内閣	1 7 0 8 6 円
1 6 年	大東亜戦争	1 6 円 5 0 銭	5 3 年		1 7 1 7 6 円
1 7 年		1 6 円 9 0 銭	5 4 年	大平内閣	1 7 1 7 6 円
1 8 年		1 8 円 4 2 銭	5 5 年	鈴木内閣	1 7 5 3 6 円
1 9 年	小磯内閣	1 8 円 8 0 銭	5 6 年		1 7 7 5 6 円
2 0 年	鈴木内閣 終戦	6 0 円	5 7 年	中曽根内閣	1 7 9 5 1 円
2 1 年	吉田・片山内閣	2 2 0 円	5 8 年	日本海中部地震	1 8 2 6 6 円
2 2 年	芦田内閣	7 0 0 円	5 9 年		1 8 6 6 8 円
2 3 年	吉田内閣	1 4 8 7 円	6 0 年		1 8 6 6 8 円
2 4 年		1 7 2 5 円	6 1 年		1 8 6 6 8 円
2 5 年		2 0 6 4 円	6 2 年		1 7 5 5 7 円
2 6 年		2 8 1 2 円	6 3 年	竹下内閣	1 6 7 4 3 円
2 7 年		3 0 0 0 円	平成元年	海部内閣	1 6 7 4 3 円
2 8 年	鳩山内閣	3 2 8 0 円	2 年		1 6 5 0 0 円
2 9 年		3 6 4 8 円	3 年	宮沢内閣	1 6 3 9 2 円
3 0 年		3 9 0 2 円	2004年に食糧法が改正され政府米以外はすべて民間流通米となりました。日本は外国からのお米に高い税金をかけ、外国輸入されたお米を売れにくくしています。これを「関税」といい、2004年には490%の関税が適用されたということでした。 私たちの口に馴染んだかけがえのない日本のお米を守る為、安全でおいしいお米を作る努力をされている農家の方々を助けるような仕組み作りをこれからも努力して行ってほしいと思いました。		
3 1 年		3 9 9 5 円			
3 2 年		3 8 5 0 円			
3 3 年		3 9 6 0 円			
3 4 年		3 9 6 6 円			
3 5 年		4 1 1 7 円			
3 6 年		4 2 8 9 円			
3 7 年		4 8 8 2 円			

街道の高度差表を書く

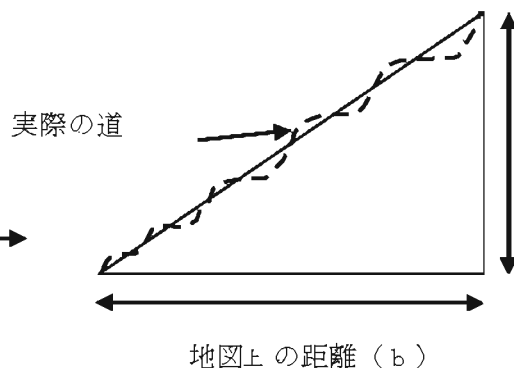
実際に現地を歩くことが出来なくなりましたので、せめて高度差表をつくり街道を実感したいと思いました。以前山岳部顧問をされていた先生にお聞きしました。（机上 登山と言っておられました。）

- i 実際の道（歩く場所）を地図上で確認する。
- ii その行程を直線に近い形で細かく区切り、番号をつける。
- iii その行程の地図上の距離をギルビメーター（地図用メジャー）で読み取り、表に記入する。
- iv その行程の標高を地図上から読み取り、表に記入する。
- v 実際の距離を公式に当てはめ計算し、表に記入する。
- vi グラフ化する

【ポイント】

- ・ 地図上の距離には高さが含まれていない為、標高差がある本来の道では地図上の距離よりも長くなるため、地図上の距離と標高差の数値を計算し実際の距離を出す必要がある。
- ・ 細分化するほど正確さが増す。アップダウンがあればそこでも区切る。
- ・ 地図上の距離は同じ標高での移動距離しかあらわしていない為「※」の計算が必要。
- ・ 25000分の1であれば1実線10メートルの間隔である。

※



「地図上に距離」を底辺に
「標高」を高さにした三角形を作る
斜辺上の距離を求めるには
ピタゴラスの定理を当てはめる。
実際の道はでこぼこしているので
直線距離よりもいくぶん長くなる
これを（経験上）約1.2倍とみる。

$$\text{実際の道（距離）} = \sqrt{\text{標高差}(a)^2 + \text{地図上の距離}(b)^2} \times 1.2$$

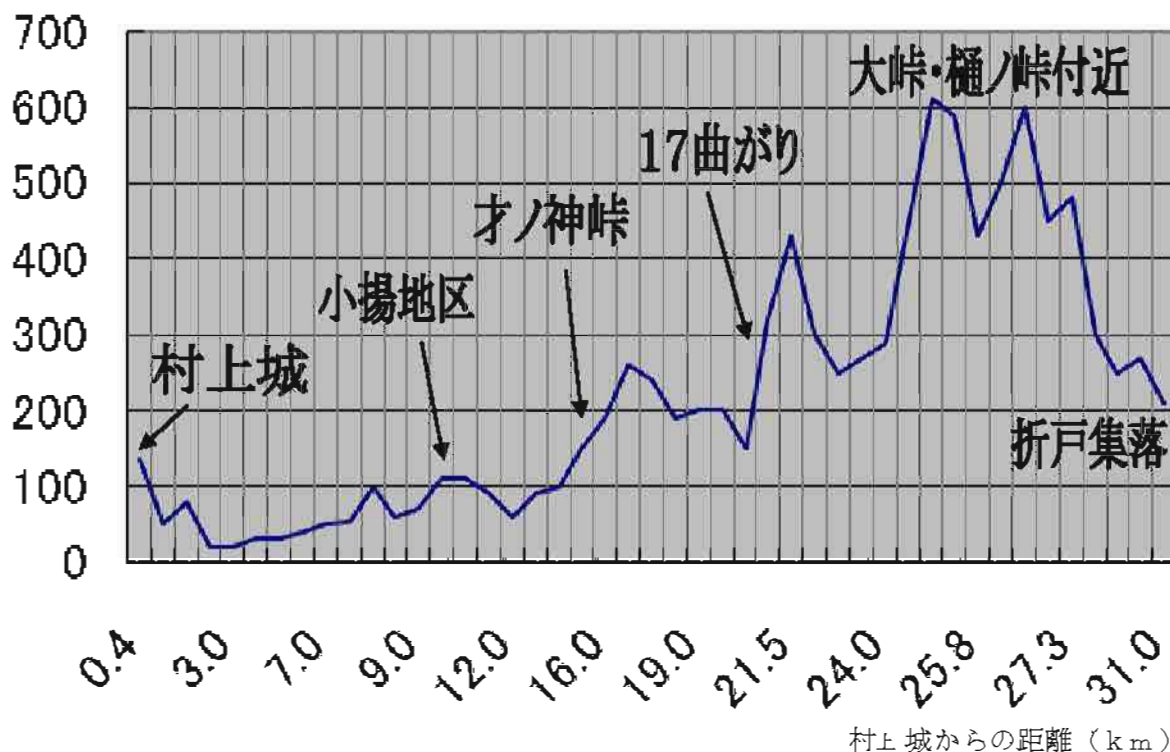
これで算出した各区間の値を足す。

	AB間	BC間	CD間	DE間	EF間	FG間	GH間	HI間
標高差								
地図上の距離								
実際の距離								

この表を元に用紙にグラフ化する。

今回の作成にあたり使用した地図は国土地理院発行の（25000分の1）です。昔は国家の威信をかけて日本全土の地図作り事業をしていた事を聞き驚きました。この地図4342枚に3次元の日本全土が描かれていることになり、これを解読できれば国土全体の情報が得られることを知りとても感動しました。人間の努力というものは形になると想像を越える気がしました。

標高（m）



地図には所々しか登山道がないため、「大峠を北に見る、烏帽子山を南に見る。荒川や綱木川に沿って」などという言葉だけの歴史書と絵図を参考に抜けているルートを探しました。なるべくアップダウンのないように山の谷の部分を経由するように道が開かれていました。しかしどうしても迂迴路が見つからない場合にも、極力高い山に登ることのないように道が造られていたような感じを受けました。また、この辺りは山が深く急な場所が多いにも関わらず「助け」や「問屋」があったとされる場所は、落石や雪崩がありそうな急坂は避けられ、辺りが広くて平坦な場所に設置されていたことがわかりました。



絵図を手掛かりに地図からルートを探し、協力して高度差表をつくりました。

(5) かるた制作

1 制作にあたり

今回の学習を生かして、今私たちが伝承という意味で何かできないかと考え、子どもたちから大人まで興味をもってもらえるカルタをつくることにしました。「読み札をきいて、絵札をみる」そんな形で言い伝えを知ってもらえる事ができればとの思いで作成しました。

社会科地域素材の教材化を目的として1996年から群馬大学教育学部の授業の中で「【群馬の】郷土かるたづくり」を行っているということをインターネットで知りかるたづくりのプロセスを参考にさせていただきました。

- ・各自で題材設定
- ・文献やインターネットで基礎調査
- ・現地聞き取り調査
- ・調査報告会
- ・札作り（絵札・読み札・解説文）
- ・完成（かるた大会）

「現代版「群馬の」郷土かるたづくり」より

これを私たちにアレンジしてみました

- i 言い伝えの採取。
- ii 読み札を考える。
子どもにも扱えるように次の約束事を決めました。
 - ・リズムカルに言える様に5・7・5調でつくる
 - ・幼稚園児にも理解できる文を構成し、漢字にふりがなをふる。
 - ・小国らしさを入れる
- iii 絵札を考える
 - ・絵札は（生活・祭事・動物）などに色分けする。
- iv 下絵を描く。
- v 下絵をパソコンに読み取り、線を描く。
- vi 拡大印刷し、色を塗る。
- vii 厚紙に張り、切り取る。
- ix 読み札をつくる。

2 かるたを作る

i 言い伝えの採取

昔物語だけでは数が少ないという理由から、言い伝えカルタ（生活・自然・動物）を制作することにしました。日常生活の作法に詳しい方を探しお話を伺うことにしました。



学校の先生もなされていた海老名美恵子さんのお宅に伺い聞き書きを行いました。ご近所にお住まいの栗田文枝さんと塚原 かるさんにもご一緒していただきお話を伺いました。始めは考えていてもなかなか出てこなかったのですが、世間話をきっかけに「そういえば・・・」などと事柄が次々と出てきました。言い伝えとは、生活に浸透し過ぎているためなのか、なかなか普段は見えない存在である事に気がつきました。

今回お聞きした方々は家で仕事が多い女性の方だったためか、あらかじめ考えていった、観天望気や雪形に関する話が少なかったのは残念でした。天気に左右される仕事に従事されている方にもお話を伺わなければならなかったことが反省として残りました。

ii 読み札を考える。

お聞きした言い伝えを元に読み札を考えました。

	採取した生活の言い伝え（上段） 考えた読み札（下段）
あ	夜、爪を切る時は「たかのつめ」を3回言わないと不幸が訪れる。 【合言葉 夜のつめ切り たかのつめ】
い	朝の蜘蛛は逃がしてよいが、夜の蜘蛛は成敗する。 【いい予感 朝 蜘蛛逃がして ラッキーディ】
う	上の歯が抜けたら家の（縁の）下に投げる。 【上の歯が 抜けたら下に 投げましょう】
え	カラスの羽を見たら「えんがちょう」を3回すると幸せが訪れる。 【えんがちょう カラスの羽を 見たらする】
お	新しい靴は葬式の時に履き下ろす。 【お葬式 靴の新品 履いていい】
か	からすが夜鳴くのは不吉である。 【カラスらの 夜鳴きは不吉だ 注意せよ】
き	集合時の写真撮影などの際、真ん中に入る人は短命になる。 【気をつけろ 写真の真ん中 あぶないよ】
く	夜に黒猫を見ると不吉なことが起こる。 【黒ねこだ 縁起が悪いぞ すぐ逃げろ】
け	椿はお見舞いに持って行ってはいけない。（花（首）がとれる） 【決してね お見舞いに椿は 持ってかない】
こ	ごはんを残すと（食べ物で粗末にすると）目が見えなくなる。 【ごはんをね 残すと天罰 目が見えない】
さ	アジサイやあやめが咲くと梅雨に入る。 【咲いている アジサイ・あやめは 梅雨サイン】
し	新聞や紙を踏むと足に怪我をする。 【新聞を 足でふむと ケガするぞ】
す	ねぎを食べると頭が良くなる。 【スーとね 頭が冴える ねぎ食べよ】
せ	カレンダーを踏んではいけない。 【ぜったいに 踏んではいけない カレンダー】
そ	葬式の家の前を通る時は、親指を隠さないと親不孝になる 【葬式に 親指隠さず 親不孝】
た	お墓で団子を食べると風邪をひかない。 【団子をね お墓で食べると 風邪ひかない】
ち	朝 茶は2杯飲む。 【茶を飲むは 朝にかぎり お代わりを】
つ	つばめが低空飛行をすると雨が降る。 【ツバメがね 低く飛ぶと 雨が降る】
て	災難よけに梅干しを食べる。 【出かけるの？ 災難よけに うめ食べろ】
と	鳥の羽根を見たら「3回まわってごめんなさい」をする。 【鳥の羽根 見たらみまわり（3回り）ごめんなさい】
な	南天は縁起がいい。 【南天は なんだかとても 縁起がいい】
に	午後から新しい靴を履く際には、靴を鍋の底に擦りつけてから履く。 【ニューシューズ アフタータイムは 鍋すりよ】
ぬ	下の歯が抜けたら屋根の上に投げる。 【抜けちゃった 下の歯だったら 屋根の上】
ね	猫が耳をこすると天気がいい。 【ねここ（猫たち）がね 耳をこすると 晴れちゃうぞ】

の	土曜日は土いじり（農作業）してはダメ。
	【農作業 土曜日しては いけません】
は	ハチに似た虫が出ると雪が降り始める。
	【ハチに似た 虫が出ると 雪が降る】
ひ	冷たい水にお湯を入れてはいけない。
	【冷や水に 熱湯入れちゃ ダメダメよ】
ふ	怪我をした所が痛くなると次の日雨が降る。
	【古傷が 悲鳴をあげたら 雨前兆】
へ	へんくさ（カメムシ）が多い年は雪が多く降る。
	【へんくさが 多い年は 雪多い】
ほ	蛇の夢を見るとお金が集まる。
	【本当に？ 夢に蛇出る お金持ち】
ま	朝の虹を見ると雨が降る。
	【マジですか？ 朝虹見ると 雨が降る】
み	ミミズの皮は解熱作用がある。
	【ミミズスキン 煎じて飲むと 熱下がる】
む	飯豊山の雪形が牛の形になると種を蒔く時期。
	【昔から 飯豊山見て 種を蒔く】
め	夜爪を切ると、親の死に目にあえない。（夜爪→世詰め→短命）
	【目が点だ 夜の爪切り 親不孝】
も	妊婦の腹がとがっていると男の子。妊婦の腹がまるまっていると女の子。
	【盛り上がり おなかの形で 男女別】
や	カラスがしんみり鳴くと人が亡くなる。
	【やな予感 変な鳴き方 人が逝く】
ゆ	雪が少ないと山菜があまり取れない。
	【雪少ない 大好きな山菜 取れないよ】
よ	夜、口笛をふくとドロボーと蛇が出る。
	【夜笛でね ドロボーとへびを プレゼント】
ら	吾妻山の雷は雨を持たない。
	【雷雲は 雷落とすが 雨降らず】
り	妊婦の顔が陰しいと男の子。
	【凛々し顔 たぶん赤ちゃん 男の子】
る	女の人（トイレを）掃除すると綺麗な女の子が生まれる。
	【ルームケア 産むと綺麗な 女の子】
れ	猫が顔をこすると雨が降る。
	【歴然だ 猫の洗顔 雨降らず】
ろ	幼児にミルクと果物（ジュース）を一緒に飲ませてはいけない。
	【論外だ 幼児にジュースは 飲まずのは】
わ	障子戸や畳などの仕切りは踏んではいけない。
	【わーダメダメ 畳の仕切りは 踏んじゃだめ】
を	葬式の時、朝茶は一杯だけ飲む。
	【輪を乱す？ 葬式の際は 茶は一杯】
ん	仏壇に生臭いものはあげない。
	【んっ？臭い 生もの仏壇 にはあげない】

iii 絵札を考える

読み札からイメージを掴み一枚の絵で表現する為には
どんな構図がよいか、一目でわかるように工夫しました。

iv 下絵を描く。

鉛筆ではじめに下絵（ラフ）を描きました。（写真上）
アニメが得意ということで班長の船山滯が担当しました。

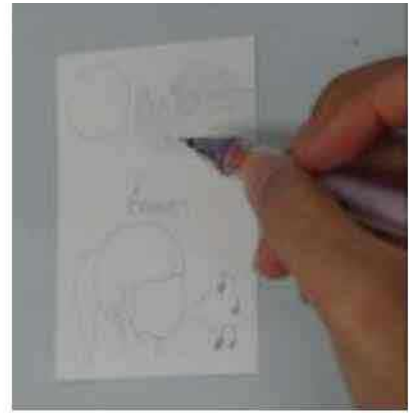
v 下絵をパソコンに読み取り、線を描く。（写真下）

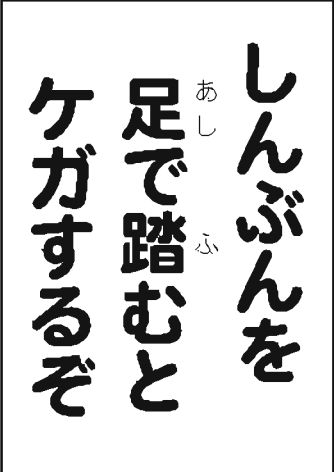
下絵をスキャナーで取り込み、下絵の線をトレースし、
ベクトル線にします。（ベクトル線にすることで拡大し
ても荒れないそうです）

vi 拡大印刷し、色を塗る。

彩色はパソコンでも出来るそうですが、手作り感を出
すために、印刷をしてからその紙に直接、色を塗ってい
くことにしました。

言い伝えの項目をわかりやすくする為に、絵札のふち
は〈生活 黄色〉・〈祭事 緑〉・〈動物 青〉に色を分けてみました。



	
下絵	色を塗った絵札
	
作業風景	読み札

vii 厚紙に張り、切り取る。

ダンボールにのりづけし、A4サイズ（210mm×297mm）に切り取ります。

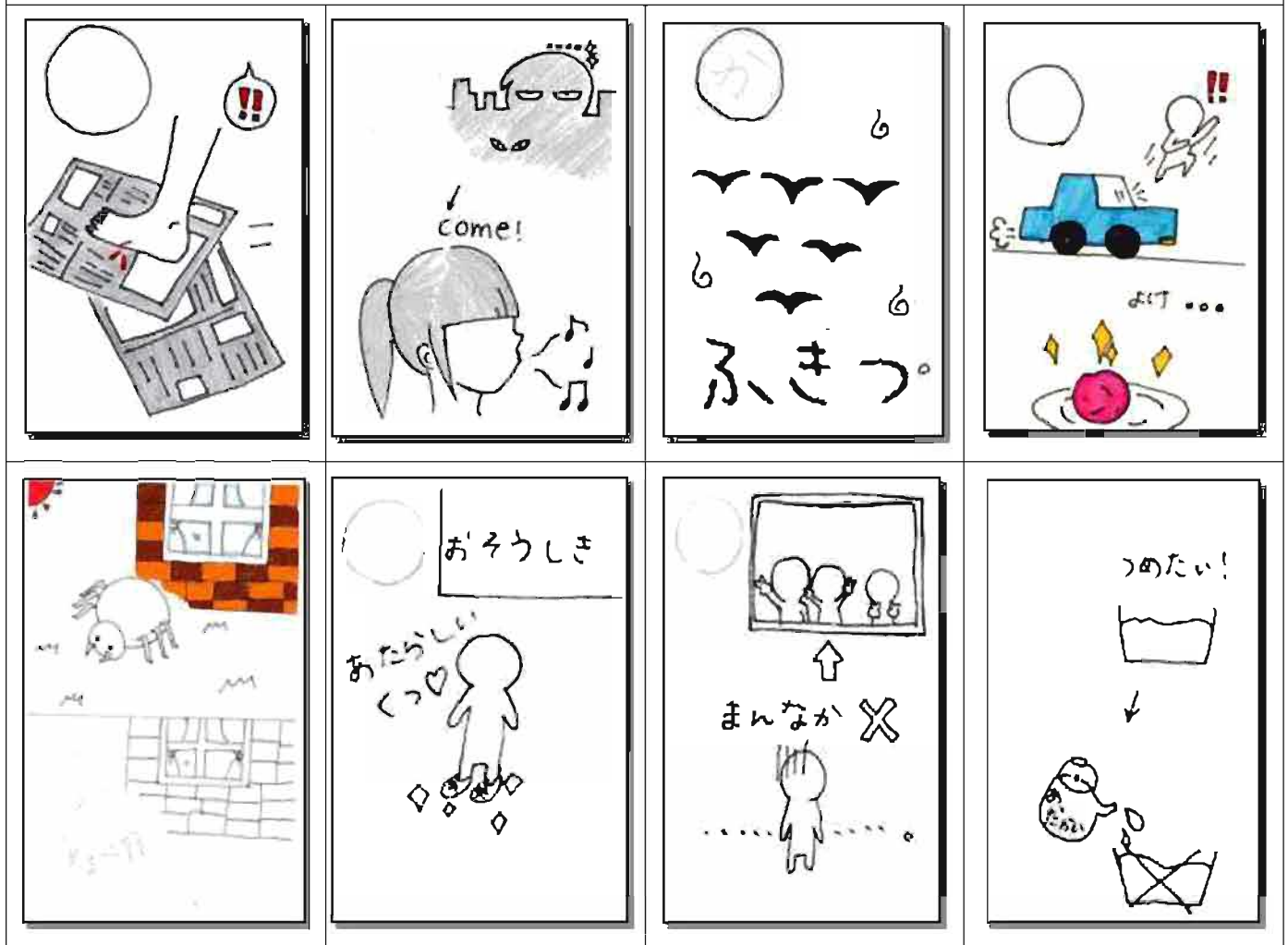
ix 読み札をつくる。

読みの文章を入力し、名刺サイズで印刷し完成です。



読み札作成の際、重複のない頭文字で言葉を組み立てる事は予想以上に難しい作業でした。また絵札も「～をすると～になる」といった言い伝えが多いため一枚の絵で表現するにはどうしたらいいだろうという話し合いがほとんどで想像力を掻き立てられる作業の連続でした。その事も影響し、思いのほか作業に時間がかかり、全て完成までには至りませんでした。完成した際には地元の幼稚園児に実際に遊んでもらおうとプレゼントしたいと考えています。

絵札（9月12日現在）



(5) 調査を終えて

当時小国町は羽前小国郷と呼ばれ集落は細分化されていたことなど、地元生まれ今まで生活してきたにもかかわらず、知らなかったことが多いことに驚きました。さらに昔物語から調べていく上で、小国の風習や習慣などの発見もあり、知る楽しみを感じながら学習を進めることができました。屋号や地名など、その土地で特化した部分をモチーフに自然や生活に関しての名が多くつけられていました。北部地区に限り地名のルーツを調べましたが、生活環境に沿ったその名前のつけ方は特に興味を持った部分です。しかしどれも断定されたものではなく「知らない内にそういわれていた。」などというものが多数であり、ルーツをたどるということは、回数、期間ともに長期にわたる取材が必要な事を知りました。ルーツに関してはもっと多くの発見ができるように、お聞きできる方がご健在のうちに調べ続けていきたいと思いました。

聞き書きで良かった点は、昨年の反省をいかし、お聞きする人を探す際にその地区の家の屋号を参考にした事です。それによってスムーズに取材を進めることができました。しかしその反面反省点も出ました。それはI Cレコーダーを使い一言も漏らさず記録するまでは良かったのですが文字に起こす作業で時間がかかり過ぎその後の計画が遅れていった事です。それはしっかりと役割分担をしていなかったという事が原因でした。

街道については、藩を越えての経済・文化の大動脈であったこともあり、小国側から探るだけでは正確なものとはいえないと教えていただき、それぞれ村上・長井など地元の図書館に向き史料を参考にできたことは良かったと思いました。ただ、舟運に関しては、酒田からの最上川舟運や、米沢藩（置賜）領内などの舟運の取り扱いに関してなどを調べる際も参考となる文献や歴史書が膨大にあり、進むにつれて次第にテーマからかけ離れてしまう事も多々ありました。始めは数名でチェックしていたのですが、後半は時間の関係もあり個人で担当することが多く確認作業が疎かになり、気がつけば違う方向に進み過ぎていたというものです。レポートのまとめ方の難しさを改めて感じました。

塩の道や西山街道からはその時代の人々の生活に密着していた事を学びました。人々に必要とされ、望まれていたからこそ、このような大事業も協力を得られ成し遂げられたと感じました。見学してきた塩の道の入り口は、我々には単なる田んぼ道にしか見えなかったのですが、当時街道開拓にたずさわった多くの方々の尽力があり、そんな方々の子孫である私たちが今こうしてこの土地で生活をしているということを考えると、とても不思議な感じがしました。私たちは平成時代しか生きていません。授業で習ってはいってもそんな歴史事項は実感がわきませんでした。しかし今回の学習で明治・大正、そして飛躍的に経済が発展したといわれる昭和の背景を知ることができ、さらにその時代の歴史録はこの小国にもしっかりと刻まれていることが分かったことで、地元への愛着が一層深くなりました。日本史からみれば小さな歴史かもしれませんが私たちの住む、この自然豊かな小国町の古くて新しい発見ができて満足しています。これから先も誇りを持って「好きな故郷」と呼べる魅力あふれる小国町になるように私達も学習を重ね、新しい歴史を創り、そして昔の歴史を守っていかなければならないと強く思いました。

参考

- ・小国町の昔物語について 平成 21 年度小国高校リポート
- ・庶民信仰と伝承芸能 菊地和博 著
- ・やまがた民俗文化伝承誌 菊地和博 著
- ・最上川と羽州浜街道 菊地和博 共著
- ・とよゐのむかしかたり おぐに鼓友塾・佐藤とよゐ共著
- ・年中行事読本 金儀右衛門 著
- ・800 年来の霊湯 いでの湯 北野猛 著
- ・みちのくの民話 東北農山漁村文化協会編集
- ・おきにわ ふるさと学習資料編集委員会編集
- ・雪国の語部置賜地方の民俗誌 武田正 著
- ・観る照らす山形 (財)山形県生涯学習文化財団編集
- ・イザベラバード極東の旅 1・2 金坂 清則編訳
- ・置賜の庶民生活 1・2 置賜民俗学会編
- ・小国の民俗風土記 奥村幸雄 著
- ・山形県史 6 巻
- ・長井 市史 2・3 巻
- ・いにしへの道“塩の道”を尋ねて 六ヶ字地区塩の道保存協議会
- ・歳々風雨物直咄集 新野伊三太著
- ・置賜の戊辰戦争 歴史保存会編集
- ・山形県の交通史 長井 政太郎著
- ・最上川舟運と山形文化 東北出版企画編集
- ・長井の宮舟場 長井 歴史保存会編集
- ・舟場というところ 舟場公民館編集
- ・山楽百花 小荒井 実著
- ・塩の道 宮本常一著
- ・平野郷土史 平野郷土編集委員編集
- ・浜の観天望気 酒田海上 保安部編集
- ・「現代版「群馬の」郷土かるたづくり」より

今回レポートを作成するにあたって参考とさせていただいた本を執筆された方々始め
このような地元の歴史を探究する機会を与えていただいた皆様方
調査にご協力をいただいた関係者の皆様 大変ありがとうございました。

「雑誌 O g u u で発信—宇宙と大地、そしておぐに人—」

班員 伊藤静香 笠原美寿々 長濱千佳 宮野真梨恵 山口めぐみ

1 テーマ設定の理由

昨年度の雑誌「Oguu」の発行を受けて、今年も小国町の地域文化を学び、現在行われている小国町での活力ある活動や新たな魅力を雑誌「Oguu 第3号」として発信することにした。

過去の「Oguu」でも特集した「小国町の雑穀」について調べを進めていく中で、宇宙という広大で新たな空間への目線、小国の豊かな自然とのふれあい、小国町で活躍する人たちとの出会いがもたらされた。そこで、今回の特集のメインテーマを、「宇宙と大地、そしておぐに人」とした。

2 調査の概要

(1) 雑穀の取り組み・・・「特集1：宇宙へと旅立った雑穀たち」

- ・宇宙雑穀を知っていますか？
- ・秘伝と雑穀の栽培記録
- ・雑穀の輪

(2) 畜産体験特集・・・「特集2：小国に生きる」

- ・搾乳体験
- ・基督教独立学園生徒との懇談会

(3) 横根の森の特集・・・「特集3：大地へ飛び出そう！」

- ・横根「健康の森」を歩く
- ・森を考える



O g u u 3号の表紙

3 特集記事概要

(1) 「特集1：宇宙へと旅立った雑穀たち」

① 宇宙雑穀を知っていますか？

(株)リバネス、宮坂醸造(株)が進める、国際宇宙ステーションの日本実験棟「きぼう」での科学実験に選考された、小国町産の秘伝(大豆) 7 g と、高きび・もちきび・アワの3種の雑穀それぞれ 3 g が、現在宇宙に滞在している。

6月20日、関係者が一同に会しての「おぐに秘伝豆&雑穀 宇宙へ」と題する講演会が、町商工会研修室で行われた。この会に参加・取材させてもらい、プロジェクトの経緯、これまでの活動と今後の計画について調べた。

3月30日、宇宙に送る出発式がアスモ内で開催された。
5月14日、NASAケネディ宇宙センターから、スペースシャトル「アトランティス号」が無事打ち上げられた。
予定では10月に「エンデバー号」で帰還(現在、遅延している)し、来春6月に、町内での栽培を行う計画にある。

宇宙を旅した種子が小国町で、どう育つのか興味深い。



関係者との名刺交換の様子

② 秘伝と雑穀の栽培記録

小国町を代表する秘伝と雑穀をどの紹介するか。そのためには、それらの生態を理解することであり、それらをよく知る人に聞く必要があると考えた。そこで私たちは、自分たちが秘伝と雑穀づくりに挑戦することにした。

小国町叶水にある山口満さん・ひとみさんのほ場で、通年の栽培体験をさせていただいた（他に、6月20日の「宇宙大豆&雑穀プロジェクト」農園開園式に参加、長崎のほ場での苗植えを体験した）。また、(株)リバネスから「宇宙大豆プロジェクト」への参加依頼を受けて、学校で秘伝の「鉢栽培実験」を行なった。この様子は、インターネット上でも公開している（<http://www.space-education.jp/soybean/oguri/>）。

◇山口さんのほ場での記録◇

6月12日：夏を思わせるような天候の中、苗植えを体験する。

8月24日：猛暑の中の草取り。秘伝は1mを超え、高きびの背丈は身長を超えた。

9月13日：悪天候のため、予定していた収穫作業を中止。

9月17日：天候回復の合間に収穫作業。ぎっしりと実をつけた穂を手作業で刈る。

11月6日：種落し作業、山口さん宅で早速収穫した秘伝と雑穀使ってカレー作り。



苗植えの様子

薄紫の花がみられる秘伝

収穫の様子

秘伝&雑穀入りカレー

③ 雑穀の輪

宇宙雑穀の調査をとおして、この1年で様々な皆さんに出会い、たくさんの情報提供や助言をいただいていた。その一人一人に応じたインタビューリストを作成し、「雑穀とのかかわりと雑穀への思い」について、いくつかの手法（面接、メール、電話、FAX）による聞き取り調査を実施・集約する、これを特集1とOguu制作の締めくくりとした。

＜取材一覧＞ ※11月末のリストであり、一部予定者を含む

i 宇宙プロジェクト関連

- ・(株)リバネス代表取締役 高橋修一郎 氏 ・宮坂醸造(株)執行役員 杉浦 孝典 氏
- ・(株) // コンサルティング事業部 松原尚子 氏

ii 町関係者

- ・小国町産業振興課課長 高橋 一栄 氏 ・小国町産業振興課 中津川典広 氏

iii 雑穀振興プロジェクト関係者

- ・田沢頭グリーンネット 石垣 正憲 氏 ・五穀の会（生産者） 渡部 茂雄 氏
- ・旬彩工房（兼 生産者） 山口ひとみ 氏 ・雑穀アドバイザー 新野 伸子 氏

iv 「大学コンソーシアムやまがた」関係者

- ・東北公益文化大学 温井 亨 氏（他、夏季中間発表で助言いただいた先生と学生）

雑穀が縁で広がったこの輪の中に、私たちも加わりたいと感じた。来年度も、ほ場での作業をお手伝いや、学校内の花壇にある空スペースの使用許可をもらって、雑穀栽培を始めるなど、何らかの活動を継続して、町の名産にかかわっていきたいと思う。

(2) 「特集2：小国に生きる」

小国町叶水にある基督教独立学園高校を訪ね、畜産体験取材を行った。この取材をとおして、生きものを世話することの難しさ、その命の尊さを実感した。そして、ここで毎日活動する高校生との出会い、それぞれの考えや思いを交流する機会を図った。

① 畜産体験

7月13日、基督教独立学園高校の直木道之助先生と、同学園で学ぶ畜産部の高校生からご指導いただいて、午後の畜産体験を行なった。

午後1時過ぎ、牛舎から牛を出し連れ出しての放牧、この時間は、牛にとっては昼食の時間、人にとっては世話の時間となる。放牧中の牛の見守る、牛舎内での食事となる「草取り」とその運搬、牛舎内の排泄物を運び出す「清掃」と、人の業務は多い。この中で「牛舎内清掃」を担当することとなった。成牛は、1日に約40kgの草を食する。そのため排泄量も多く、これを一輪車で運搬することは、まさしく力仕事であった。しかも当然のことながら、悪臭もきつかったが、無心に作業に取り組むことができた。

清掃を終え、いよいよ搾乳。この頃になると牛への恐怖心もなくなり、畜産部の高校生のサポートを受けながら、生まれて初めて搾乳を体験し、その牛乳を譲ってもらった。

牛乳を自宅で加熱殺菌して飲んだ。濃厚で粘りがあり、草の風味がそのままするようで、市販品とは異なった。この素材を生かした料理が何かできないものか、今後考えてみたい。

搾乳作業は日に2回、これを毎日繰り返すのだという。身にしみて大変な作業であることを知ると同時に、同じ高校生が取り組んでいる姿に感動した。7月15日、2回目の訪問では、時間の関係から搾乳だけを体験。牛へのコンタクトにも臭いにもすっかりなじみ、笑顔で従事できるようになった。



直木先生と畜産部の皆さんと顔合わせ



搾乳前に消毒



初めての搾乳体験

② 高校生座談会

12月18日、基督教独立学園高校の高校生との交流を振り返り、共有のメッセージを発信することを目的とした座談会を開催した。

座談会は、互いの高校生活に対しての疑問や関心事項を事前に交換し、当日これに回答しあう形式でスタートした。そこから、「生活に欠かせないものは？」・「楽しいと思える時間は？」・「小国町をどう思うか？」など、現在の生活について意見交歓し、その後「進路をどう考えるか？」・「どのような生活をしたいのか？」・「小国町でできることは？」など、将来の目標について話し合いを深めた。

同じ小国町に住みながら、異なる生活様式で過ごし、これまでほとんど交流の機会がなかった高校生同士が、互いの意見を交わし、思いを共有できたことは大きな意味があると思った。私たちの交流の様子を紹介することで、他の高校生や地域の人とも同じ話題を考えることができれば、より意義は深まると思った。

(3) 「特集3：大地へ飛び出そう！」

一昨年の特集は南部の「温身平」、昨年は北部の「カクナラの森」、そして今年は横根にある「健康の森」についての特集記事を掲載することにした。

① 横根「健康の森」を歩く

森林セラピーアテンダントの舟山功さんの案内で、8月23日に「健康の森」、25日に「温身平」を歩き、森林に関する学習、自然体験を行った。

特集に掲載した「健康の森」では、5kmほどの整備されたハイキングコースの散策の様子を紹介した。道中、たびたび立ち止まり森林観察を行なった。ブナの木に聴診器をあてて耳を澄まし、クロモジの枝を手にとって匂いを観察した。展望台では、朝日連峰と小国の町並みを眺めて休息。長寿の「化物杉」に手でふれて、「八木沢大滝」ではかわいい宝石探しに没頭した。そして「風穴」では、天然の涼に安らいだ。

「健康の森」を歩いて、町の中心地から比較的近いところに、これほど豊かな自然があることに感動した。また、ポイントごとに舟山さんに案内いただいたことは幸運だった。

この体験をとおして、案内人の存在と役割が重要だと思った。案内人が同行しない場合は、パンフレットや案内板などのインフォメーションサービスがより重要であると感じた。ポイントごとにタイムリーにインフォメーションできる工夫として、携帯電話でおなじみの「QRコード」を活用した配信はどうか、というアイデアが浮かんだ。



舟山さんによる森林歩きレクチャー



ブナの根が水を吸い上げる音を観察



「健康の森」にも広がるナラ枯れ...

② 森を考える

「健康の森」で直面したナラ枯れ被害の様子について調査することにした。

県の記録では、小国町の民有林におけるナラ枯れ被害は平成17年度から報告されている。平成18年度が165本、また置賜地区の他の市町村での被害報告はなかった。それが、平成19年度には川西町・長井市・飯豊町に、平成20年度は残る置賜市町村全てに拡大している。平成21年度では、小国町は県内最多の4万2301本を記録している。

ナラ枯れの原因は、体長5ミリほどのカシノナガキクイムシが原因である。被害木を放置すると、4～5年で倒木がはじまるとされる。つまり、倒木というさらに痛ましい姿が今後目立つことが推測され、駆除対策と予防対策が急がれる。駆除対策として、被害木の幹に殺虫剤を注入する方法、被害木を伐倒した後ビニールで覆い殺虫剤を散布して駆除するなどがある。また予防対策として、健全な木の幹の根元にナラ菌を殺菌する薬剤を注入し予防する方法がある。しかし被害が拡大し続けているのが現状である。

この窮地に新たな対策が検討されている。山形県森林研究研修センター斎藤正一森林環境部長によれば、大量に積み上げた丸太に合成フェロモンを仕掛けてカシノナガキクイムシをこの丸太に誘引して駆除する方法が効果的な対策になりうるという。

12月16日、この調査の裏付けのため、町の被害状況と予防対策について、町産業振興課を訪問取材した。

4 活動のまとめ

- (1) 特集1「宇宙へと旅立った雑穀たち」では、宇宙雑穀を紹介し、小国町に対する町の取り組みを知ることができた。また私たち自身が、秘伝や雑穀を苗植えから収穫まで行い、その恵みを食してみたことで、より身近な存在として捉えることができた。宇宙から帰還した雑穀の成長に視線が集まることを期待したい。町を代表する雑穀に対して、小国町では人と人の輪が存在し、絆が深まりながら広がっているようだった。高校生である私たちも参加してみようと、強く働きかけてみたい。
- (2) 特集2「小国で生きる」では、貴重な体験取材の様子を紹介すると同時に、高校生同士の新たな交流ができた。育てるとはどういうことなのか、自分たちにとって宝は何か、など、自分の思いを語り、人の思いを聞くことで、小国に生きる高校生の思いを共有することができた。この思いを、他の高校生と地域の人に発信したい。
- (3) 特集3「大地へ飛び出そう！」では、「健康の森」を歩き、小国の豊かな自然を満喫する一方、森林被害の現状を深刻に受け止め、これを調査することができた。森林の魅力だけでなく、森林で今何が起きているのか、今後これを広く発信したい。
- (4) 取材・調査を行っての感想（個人毎）
- ・ 苗植えや収穫を体験して、雑穀への興味がわきました。町の素晴らしさ、人の温かさにふれました。宇宙いった小国の雑穀が有名になって欲しいと思いました。（伊藤静香）
 - ・ 個人の安易なアイディアが、いつの間にか全員の真剣な記事づくりに向けた行動へと発展していきました。何事にも興味をもつこと、仲間と協力することなど、たくさんのことを学び、たくさんの達成感をえました。（笠原美寿々）
 - ・ 雑誌づくりのなかで、今まで知らなかったことを知ることができました。また、たくさんのお出会いにも恵まれ、とても良い経験になりました。（長濱千佳）
 - ・ 雑誌 Oguu 制作活動をとおり、雑穀づくりや畜産体験や自然体験と多くのことを学ぶことができました。小国の魅力が Oguu で伝われば嬉しいです。（宮野真梨恵）
 - ・ 小国町は私が思う以上に、自然が豊かである一方、深刻なナラ枯れ被害にさらされていることに気付きました。また「宇宙雑穀」は取材活動をとおり知ったのですが、宇宙と小国が、雑穀でつながっていることに驚きと喜びを覚えました。（山口めぐみ）



「健康の森」バンガローでの呉先生の講義



温身平での森林セラピー体験

最後に、ご指導いただいた東北公益文化大学の呉尚浩先生と、取材に協力いただいた方々へこの場をかりて厚く御礼を申し上げます。

「小国町の観光資源を考える」

班員 安部朋晃 安部美里 伊藤綾乃 佐藤瑞樹
齋藤誠也 齋藤信浩 前田宜之

1. テーマ設定の理由

私たちが住む小国町は、豊かな自然に恵まれている。私たちはともするとその自然を当然あるものとして考え、どれだけ貴重なものであるかを実感する機会が少ない。また自然以外にも、小国町には多くの施設や神社などが存在する。それらは小国町を訪れる方にとっては大きな魅力となるものであり、小国町にとっての観光資源であると言える。米沢女子短期大学原淳一郎先生のご指導のもと、改めてそれらの観光資源について考え、今ある小国町の魅力を探ることをテーマとした。

2. 調査の方法

- (1) 現在道の駅等に置いてある小国町の観光情報の収集
- (2) 小国高校図書館・小国町図書館所蔵の文献から情報を収集
- (3) 小国町観光協会ウェブサイトなど、インターネットで情報を収集
- (4) リストアップした観光スポットへのフィールドワーク
- (5) 夏季休業等を利用した個別フィールドワーク
- (6) 調査した観光資源を分類しまとめる。

3. 調査結果

(1) 社寺

調査で見つけた社寺は合計 20 件であった。町各地に点在する山神社（里人に恵みを与える守護の神・精霊の宿るところとして信仰されている）などを含めると、小国町にはかなりの数の社寺が存在する。以下の社寺は、特に有名なもの、フィールドワークにいったものである。

(i) 大宮神社

羽前・羽後地方の鎮護と人々の生命の守護神として 712 年に建立された。安産・子育ての神として有名で、町内外からたくさんの人々が訪れる。毎年 8 月 18 日の古式神事が奉納される。近年小国近辺で男根石と女陰石が見つ

かり、この神社境内の和合寢殿に納められている。

(ii) 長沢不動尊

長沢の南西、五味沢街道脇に不動堂があり、その右側の宮沢峰に発する溪流の落下する飛沫を浴びながら、不動明王が厳然と佇立している。この滝は不動の滝といわれ、古来より眼病を治す力があるとされて参詣する人が多かった。

(iii) 古四王神社

「こしおう」という神社の名は、昔満蒙方面で勢力のあった古志族が由来するといわれている。古志族は紀元前から中国に進入し、秦の始皇帝が万里の長城を築いたのもこのためであるということ。その古志族が北海道と朝鮮の二方面から日本にわたり、東北の日本海側を占拠したが、その古志族の王を祀ったのが古四王神社である。大滝の古四王神社には鎌倉期の一刀彫といわれる本尊古四王像が祀られている。

(2) 宿泊施設・レクリエーション施設

調査で見つけた宿泊施設・レクリエーション施設は合計12件であった。自然を利用した活動と宿泊施設を組み合わせたものも多かった。また町の特産品をテーマとしたものもあった。

(i) 白い森交流センターりふれ

ブナの原生林に包まれた朝日連峰の麓、荒川沿いにある。企業・学校・団体等に幅広く利用されている多目的セミナー室があり、宿泊研修には最適である。地元の素材を使った郷土料理も楽しめ、ご家族やグループにも好評です。隣接する木工館では小国のヤキ、ホウノキ、クリを使った木工体験ができます。指導員もおり、作り方の指導を受けながら自分だけのオリジナル製品を作ることができる。

(ii) 国民宿舎飯豊梅花皮荘・飯豊温泉川入荘

国民宿舎梅花皮荘は、飯豊温泉を代表する宿で、雄大な飯豊連峰が背後にそびえ、眼下には玉川の溪流が流れる見事な景観が楽しめる。こんこんと湧き出るお湯で疲れを癒し、自慢の山菜と岩魚料理を楽しむことができる。川入荘は、梅花皮荘に隣接しており、飯豊連峰を眺望できるログハウス造りの露天風呂が人気で、四季折々に変わる飯豊の山々と溪流を見ながら入浴できる。

(iii) 横根健康の森

健康の森“よこね”は、約180ヘクタールの広大な森林の中に、ログハウス、バンガロー、キャンプ場、交流センターなど、さまざまな施設が整備されている。自然の中での屋外学習や家族・友人同士のキャンプや、団体で

林間学校などに利用できる。

(3) 豊かな自然を利用した観光資源

調査で見つけた、豊かな自然を利用した観光資源は合計5件であった。やはり小国町の一番の魅力は自然である。私たちが夏に遊んでいるような川なども魅力的な資源になりうると考えた。

(i) 樽口峠

飯豊山系を見渡すことのできる絶景ポイントである。大きな表示板があり、それぞれの山の名前を確認しながらパノラマを楽しむことができる。豊かな自然に恵まれ、現在数少ないイヌワシの生息地である。

(ii) 温身平（森林セラピーロード）

森林セラピーとは、森林の地域や自然を利用した医療、リハビリテーション、カウンセリング等の森林環境を総合的に使いながら健康を増進していく取り組み。いくつかのコースがある。木々や川からセラピー効果が得られる。

(iii) 赤芝峡

磐梯朝日国立公園に属する荒川峡の中でも、一番の紅葉と評判が高い峡谷。遊歩道が整備されており木々の紅葉と澄んだ水面、白い岩肌がよく調和し、その美しさは全国屈指といわれている。

(iv) 沖庭地域の川

私たちが夏に水浴びをする川である。澄んだ水の中にはカジカやイワナなどが澄んでいて、水中メガネをかけて潜るとその姿を見ることができる。夏のアウトドア活動には最適な場所であるが、「メジロ」という虫が多くいて、刺されると2～3日は痛痒さが続くので注意が必要である。

3. 調査で得た観光資源を用いた観光プラン作成

3グループに分かれ、調査で得た観光資源を盛り込んだ観光プランを作成した。各グループはそれぞれプランのテーマを決め、一泊二日のプランを作成した。

(1) テーマ「自然と歴史」（安部美里・伊藤綾乃）

雄大な自然を楽しむアウトドア活動を中心にして、その中に歴史ある寺社を含めた。リーズナブルに楽しめるプランになっている。楽しく読んでもらいたいと思い、夏休みなどを使って実際に現地に行ってとってきた写真を使った。プランに含まれる観光資源は以下である。

(i) 大宮子易両神社・光岳寺・飛泉寺・熊野神社

(ii) 白い森交流センターりふれ

(iii) 沖庭川・荒川のみつご岩

(2) テーマ「癒し」(安部朋晃・佐藤瑞樹・齋藤誠也)

木工館で家族での思い出の作品を作り、森林セラピーで癒され、梅花皮荘の郷土料理と温泉によっても癒される。プランに含まれる観光資源は以下である。

(i) 大宮子易両神社

(ii) 梅花皮荘・白い森木工館・小国町道の駅「ブナ茶屋」・大滝温泉旅館滝の湯・白い森交流センターりふれ

(iii) 温身平森林セラピー

(3) テーマ「景観を楽しむ」(齋藤信浩・前田宜之)

紅葉の有名な赤芝峡や南部地方の自然を眺めることができ、都市部にはない景観を楽しめる。プランに含まれる観光資源は以下である。

(i) 大宮神社・熊野神社

(ii) 梅花皮荘・白い森木工館・小国町道の駅「ブナ茶屋」

(iii) 赤芝峡

3. 調査・研究を終えて

ウェブサイトや町外の施設にパンフレットが設置されるなど、様々な形で小国町のよさをアピールする手立てがとられている。私たちがそのアピール活動のお手伝いをする方法としては、今回作成したパンフレットをウェブ上で公開する方法が考えられる。

しかしこの調査研究を通して強く感じたことは、地域文化学での活動を通して、小国町に住む私たち自身が小国町の情報を多くもつことが大事であるということである。進学などで町外に住むことになったときなど、自分の生まれ育った小国を、熱意を持ち、誇りを持ってアピールできること。他市町村でも例があるように、ボランティアとして小国町の観光ガイドができるような知識を持つこと。地域文化学で得た情報や学んだことはそのような活動に役立つものであった。

最後に、原先生にはフィールドワークと一緒に行っていただき、多くのご指導を頂きました。本当にありがとうございました。

「小国町の子育て支援～ここに注目！～」

班員 伊藤菜記 伊藤栞 齋藤愛 酒井伎 佐藤秀稔 齋藤翔太 保科光輝
佐藤沙織 加藤秀哉 中津川由佳 益田結唯 毛利早希

1. テーマ設定の理由

現在、小国町には保育園はいくつかあるものの、平成 21 年より産婦人科がなくなり、出産できる病院がなくなってしまった。しかし小国町は子育て支援に力を入れていて子育てをするには素晴らしい場所であるということは住んでいる自分たちが一番理解している。現在では産婦人科がないことばかり注目され、小国町は子育てをするのに適した場所だということがなかなかクローズアップされない。そこから、私たちは今の小国町で子育てするとどのようなメリットがあるのかを、栄養と遊びの面から調査し、提案しようと思ったので、このテーマを設定した。

2. 調査の概要

- (1) 妊娠と出産～小国町の出産と現状
- (2) 育児～子どもの栄養
- (3) 育児～遊びと子どもの発達



小国町健康管理センターで保健師の方からお話を伺ってきました。

←

3. 調査の結果

(1) 妊娠・出産について

小国町では、平成 20 年 9 月から産科がなくなり出産をすることができなくなった。その為、小国にすんでいる人は、置賜病院や新潟県の病院などで出産をしなければならない。しかし、県外で妊娠検診や出産を行う場合、県や市町村の補助を受けられなくなる場合がある。そこで小国町の場合、妊娠・出産の補助はどのようなになっているか調べてみた。

①妊娠健康診査について

【定期健診】

妊娠 23 週まで	4 週に 1 回
妊娠 24 ～ 35 週まで	2 週に 1 回
妊娠 36 週から	1 週に 1 回

【定期健診の補助】

*対象	小国町に住所のある方
*回数	全 14 回 (妊娠 12 週前後～40 週前後の検診)
*上限金	初回————— 10,000 円
	2 回目以降———— 5,000 円

②出産支援事業について

【出産支援金】

妊婦の方 1 人に対して 5 万円が支給される。

【対象者】

平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日までに母子健康手帳の交付を受けた方で、申請時に妊娠中かつ小国町に住所のある方。

また平成 22 年 4 月 1 日以降に小国町に転入された方で、他の市町村で母子健康手帳の交付を受けた方でも、申請時に妊娠中の方は対象となる。

③病院・診療所数、産婦人科について

病院… 1 か所 診療所… 4 か所 産科… なし

④小国町健康管理センター訪問調査

インタビューして分かった事

- ・小国町の方は、置賜病院で出産する方が多く、新潟方面でも出産する方がいる。他にも南陽市に個人病院が2つ、米沢市にもある。
- ・少子化率が2・3年は変わっていないが進んでいる。
- ・児童数や生徒数はわからないが、入園率は高い。
- ・小国町で出産・子育てをすると、様々な支援を受けることができ、いろんな人の手助けが多い。しかし、出産ができなく、子供の衣服・ミルク・おむつなどそろえるのが大変で夜間の小児科の態勢に不安がある。
- ・小国町では、不妊治療を受けることができない。
- ・少子化対策では、県外で診察が受けられるように（妊婦健康診査費助成金）や、出産支援金が支給されたりしている。

(2) 育児～子どもの栄養

①子どもの食事について

(i) 年代別の食事栄養摂取の違いについて

	エネルギー推定必要量 (kcal)
人工乳栄養児 6～11ヵ月	700 (650)
1～2歳 (男児)	1050
1～2歳 (女児)	950
3～5歳 (男児)	1400
3～5歳女児)	1250

子どもの年代別の食事摂取で大きく違うことは、エネルギー必要量の違いが大きく異なる。(図(i)より) 栄養素は、特にカルシウムが多く必要となり、毎食にカルシウムを含んだものを摂取することが求められる。小国町の保育園内では昼食の他におやつでも小魚や牛乳などカルシウムを積極的にメニューに盛り入れられていた。

(ii) 食事の変化と食事例

下の表は、保育園児の食事例を考えてみたものである。箸を使えない子どももいることがあるので食べやすくするためにご飯をおにぎりにしている。

年少の食事	年中の食事	年長の食事
・ ご飯一杯分を五つのおにぎりにする ・ 卵一個半とほうれん草、またはソーセージと野菜サラダ	・ ご飯一杯と半分を一口おにぎりにする ・ 魚、ほうれん草、ソーセージを小さめで入れる	・ ひじきご飯 ・ こんにやくと人参のキンピラ ・ 味噌汁、果物

【欠かせない5大栄養素】

- ・基本的な栄養素（脂肪、食物繊維、カロリー）
- ・ミネラル（鉄、カルシウム、亜鉛）
- ・ビタミン類（葉酸及びビタミンB群、抗酸化剤；ビタミンA、C、E）

②おぐに保育園でのお昼ご飯の献立について

保育園でのメニューの立て方は主に健康を考えて栄養バランスがよいように出していることが分かった。あと、アレルギーがないかなど新鮮な材料であるかなどというように料理に使う食材は一から調べてから使っている。メニューの量は、幼児たちが間食をとれるよう考えメニューの量を少なくしている。幼児の年齢に合わせてメニューに使う食材噛みやすいもの、消化しやすいものなどを分けている。おもに消化しやすく噛みやすいものを用意することが大切である。

（3）育児～子どもの遊びと発達

①小国保育園を訪問してわかったこと

- ・小国保育園で人気の遊びは、運動会ごっこ。（リレー、かけっこ、競技）
また、ブロックやままごとは男女を問わず人気。
- ・中遊びと外遊びでは外遊びが人気。中でも遊んでもらえるように工夫している。
- ・昔と今では遊ぶ道具が違う。今は手先を使う遊び道具がある。
- ・工作で使うのりやはさみが使えるようになるのは3歳から。まっすぐな線、ジグザグな線が切れるようになる。
- ・工作の時間があるのは、楽しく指先を動かしていろいろな体験をする。
- ・4歳の遊びの特徴は、バランスよく動けるがまだ自己中心。5歳になるとケンカが解決でき遊びを展開できる。
- ・歌の時間があるのは、園児が歌から色々なことを覚えるから。
- ・怖い本・虫の本・クイズの本、さまざまな本を好んで読んでいる。

②子どもの遊びと発達

保育園で行う遊びと関連性について調査したところ、次のようなことがわかった。

歌を歌うことで言語の理解を早める。道具を使って脳を発達させる。体全体を使って体力の向上を図る。球技などのスポーツや集団遊びを行って団結力を高める。何気なく行っている遊びにも、様々な目的があって行っていることがわかった。さらに、保育士の方々は子ども達に遊びのルールや生活習慣を身につけてもらえるようにエプロンシアターや紙芝居などで工夫をしていることもわかった。（写真①、②）



【写真①】正しい歯磨きの仕方についてのエプロンシアターにチャレンジ



【写真②】約束事はキャラクターを使って子ども達が見たくなるように工夫していた



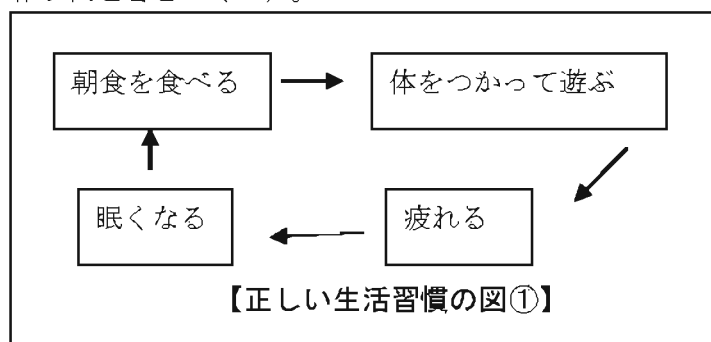
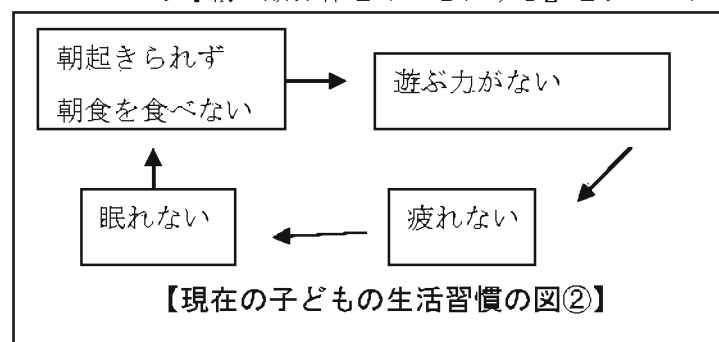
おぐに保育園訪問の様子

次に、保育園に訪問し調査した内容をもとに下表に年齢別の子どもの遊びの種類をまとめた。

年齢	0	1	2	3	4	5・6
遊びの種類	・ボール ・リズム遊び ・単純な遊び - 道具 ・お絵かき ・ぬいぐるみ ・ねんど	・輪投げ ・太鼓 ・新聞破り ・おもちゃのガラガラ	・お絵かき、積み木、砂遊び - 構成遊び	・ブランコ、滑り台	・音楽遊び ・ルール遊び ・集団遊び	・ままごと ・運動遊び - 協同遊び

③手作り紙芝居

保育園に訪問して、子どもたちは昔に比べて体力が落ちているということがわかった。また、保育園訪問でわかったことは、現在の子どもたちは、昔に比べて体力が落ちていて遊んでも疲れやすく、体力がお昼までもたないということがわかりました。その原因として考えられるのは、正しい生活習慣が行われていないことだということがわかった。(正しい生活習慣については、図①を参考、現在の子どもの生活習慣は図②を参考)そこで子どもの正しい生活習慣について松井先生から詳しく教えていただいたことをもとに、子どもに正しい生活習慣を身につけてもらうため『朝ご飯は体をげんきにする』をテーマに手作り紙芝居をつくった。



完成した紙芝居は、朝食を食べてこない子どもと、その家族の方にも見ていただきたい。子育て支援と子どもの遊びを合体させた

4. 成果や今後の課題

調べた中で、小国町にはたくさんの子育て支援があることがわかった。全国の病院数や出生率、小国町の少子化状況を調べる事が出来なかったのも、そこを詳しく調べられればよかったと思う。また子供に必要な栄養や献立の立て方、今の子供たちの生活の実態を知ることができた。課題として保育園に子供を預けているご家庭に、アンケートをとればよかったことがあげられる。沖庭地区や北部地区など他の保育園にも取材に行けばよかったと思う。また小国町で出産することがないために大変な思いをしている人がいることはこれから改善してほしいと強く思った。小国町から遠い病院へ行く間の妊婦さんの不安は大きいと思う。これからも人口が減っていくと言われている中でまずは小国町内で出産をできることを確保することが第一であり、小国町子育て支援の手厚さをアピールしていきたいと思う。

これまで調査にご協力いただいたみなさん、本当にありがとうございました。